
とあるアニメの交錯日常物語(クロスオーバー・デイズ)

world-creator.glass

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるアニメの交錯日常物語
クロスオーバー・デイズ

【Nコード】

N2275T

【作者名】

world-creator.glass

【あらすじ】

私立秋之原学園。都会から離れた小さな町にあるその学園は、ごく普通の小さな学園だった。ただ一つ、生徒全員が超能力者だという事実を除いては。そこに転入してきた主人公。暗い過去を抱えていた主人公は、そこで今まで出会ったことのない、平穏な日常に出会う……。

著名なアニメの美少女キャラクターたちが、作品の枠を超えて主人公と織りなす、ちょっぴりハーレムな、やや非日常要素入りほのぼ

の日常系物語。

アクセス10000突破しました。いつもありがとうございます。

プロローグ（前書き）

初めまして。

このサイトでの処女作となる作品を投稿させていただきました。

元々私はダ・カーポなど、日常にさりげなく非日常が混ざる作品が好きだったので、GREEにおいても世界観そのものは同じ作品を執筆させていただいておりました。

今回の作品も、GREEのそれとは世界設定そのものは同じですが、GREEのものとは方向性を180度変え、バトル要素やスペクタクル要素満載の前作と異なり、そういった要素の一切無い完全なるほのぼの日常系作品となっています。

複数のアニメを違和感なく一つの世界に同居させるため、原作の設定を維持しつつ、新たに独自の設定（主に過去と超能力）を各キャラクターに加えています。

創作ゆえお見苦しい点があるかもしれませんが、大目に見ていただけると幸いです。

くれぐれも、原作のイメージを崩されたくない方は読まない方が賢明ですよ（汗）。

また、基本的にある程度話数で完結する設定のため、ストーリー性はあまりありません。なのでそれを活用しある程度の柔軟な構成ができますので、こんなアニメをクロスさせてほしいという希望がありましたら、気軽に投稿ください。

プロローグ

超能力者。

それは人間の中で時に現れる、奇妙で不思議な力を持った者のこと。

その力を望んで持つ者もいれば、望まずしてその力を持って生まれてくる者もいる。

そして、その者たちのたどる道は様々だ。

力を惜しみなく晒し、世間の注目を浴びる者もいれば、力を持ったことを嫌い、ひっそりとその力を晒すことなく一生を過ごす者もいる。

そして、その力を世間から疎まれ、心に傷を負う者もいる。

世間の目に触れることに恐怖を抱き、表に出なくなった超能力者がどうなるのか。

それは時によりいろいろだ。

自ら望んでその力を捨て、再び社会のステージに立つ者。

世間の目がトラウマとなり、命を絶ってしまう者。

そしてもう一つは。

.....

「.....」

俺は屋上で空を見上げて昼寝をしていた。

最初は、退屈な授業をサボるために適当な場所だったので来たが、いつの間にかすっかり居心地いこちが良くなってしまい、気がつけば、学園に来ている大半の時間をここで過ごすようになっていた。

もっとも、正直授業がかつたるくて受けるのが面倒だというものもあるのだが。

私立秋之原学園。あきのはら

都会の喧噪とはおおよそ縁のない、山麓の小さな町に建てられた学園だ。

見た目は普通の学園だが、ここにいる生徒にはすべて、ある共通点がある。

それは、全員が「超能力者」であるということ。

表向きはごく普通の教育機関。しかし裏向きの顔は、世間の目を逃れ身寄りのない超能力者を引き取って、社会に適應できるようにするまで養育する特殊機関だ。

なぜこんな僻地へきぢに、こんな特殊な機関があるのか。

それは、この町の不思議な現象に深く関わっている。

その昔、超能力者が今よりもさらに珍しかった時代のことだ。

その力を周囲から妬ねたまれ、この町に逃げ込んできた超能力者の一族がこの学園を建てたことが、歴史の始まりだという。

もともと人口がさして多くなかったこの町でも、少なからず世間から白い目で見られることは予想に難くなかった。

だが、この町は、ある不思議な現象を抱えている町だったことが、

後に判明した。

この町の住民はすべて、超能力者、あるいは、かつて超能力者だった者ばかりだったというのだ。

というのは、この町に暮らす人々は、すべて、願わずとも何らかの超能力を持って生まれてくるということらしかった。

そして、その力は、歳をとるごとに弱まっていき、ある時突然その力は消えてしまう。

数百年も前から、この地ではこのサイクルが数限りなく繰り返されてきたという。

そのおかげで、この地の住民は、超能力に関してすんなり理解をしてくれた。

そうして、この学園は、住民にバッシングされるどころか、歓迎を受けて創設された。

最初は地元の子供たちを入学させ、超能力の使い方をつけさせるという趣旨だったらしいが、時が過ぎ、「超能力を持つ子供たちを社会に適応させるために教育する」という内容に変わっていった。

そうしていく中で、外部から極秘に、他の地で生まれた超能力者を引き取ることも始まった。

そして、その制度により、学園の歴史上実に18年ぶりの外部入学者としてこの学園に転入してきたのが、この俺、高岡ヒロユキというわけだ。

超能力者として生まれて早々、親は俺をどこかの養育施設に押しつけて蒸発し、俺は親の顔を知らずに育った。

そして、この後もあちこちの養育施設を転々とし、最終的にこの学園にやってきたわけだが、その間のことはまた別の機会に話すことにしよう。

もちろん、今までの中で、超能力者を扱う養育施設に世話になったことはある。

だが、どこの施設でも、俺はしばらくたつと匙さしを投げられ、別の場所に追いやられてきた。

それは、俺が、超能力者の世界でも珍しい、「超能力を複数持った超能力者」であることが原因だ。

この世界には、暗黙の了解として、一人に超能力は一種類だけという法則がある。

だが、俺はその法則に外れた人間としてこの世界に生まれてくることになった。

もともと超能力者にはある程度理解があつたらしい俺の親だが、たとえそうであつたとしても、子供が複数の超能力を持つ人間だつたなら、誰であれ恐れを抱くのは目に見えている。

そして、俺の親は恐怖のあまり俺を捨てた。

それから俺は、超能力を複数持つというだけで周りの人間から恐怖の目で見られることばかりが続いた。

結果、日本で唯一、超能力に町全体が理解をしているこの学園、この町に一縷いちろうの望みを託され、俺は半ば追いやられる形でこの町にやってきた。

そこで俺を待っていたのは、侮蔑や卑下の視線ではなく、意外にも複数能力者であることへの憧れや羨望の眼差しだった。

それは俺が複数能力者だったこともあるし、町の理解もあつた。

だが一番の理由は、俺が「男子生徒」だったことだ。

後で知ったことだが、どういう訳かこの町で生まれてくる超能力者は、すべて「女子生徒」なのだそうだ。

そのため、学園で俺に向けられたのは、複数能力者に対する羨望の眼差しよりも、異性に対する興味の眼差しの方が圧倒的に多かつ

ただ。

最初こそ悪い気はしなかったが、いつもつきまとわれて落ち着かない雰囲気は苦手だったので、結果として俺はこうして屋上が日常の定位置になってしまっているというわけだ。

もちろん、この地に来て得たものはたくさんある。

何もかもが、今までとはまるで違った。

周りはまさに平穏という言葉がふさわしかった。

俺はようやく、落ち着ける居場所にたどり着けたという実感を感じることができた。

無論、平和なことばかりではなかったのは言うまでもないが、それはまた別の話。

これから、その日常を少しだけ話すことにする。

俺がようやく出会った、平和な日常の、そのほんの一部を

登場人物紹介

左から年齢／秋乃原式超能力レベル／ベルカ式超能力レベルの順。
なお、ベルカ式はあくまで参考程度の評価である。

【高岡 たかおか ヒロユキ】

18歳／レベル5／ベルカランクSSS

この物語の主人公。私立秋乃原学園5年生。秋乃原学園唯一の男子生徒にして、学園でただ一人、超能力を複数持つ「複数能力者」の少年で、学園最高の「レベル5」の評価を受けている。物体浮遊や思念解読、遠方透視、未来予知など、多岐にわたって強力かつ高精度の超能力を併せ持ち、どんな超能力者をも凌駕すると言われるレベル。しかしその高い超能力を持つゆえに、周囲の人間から煙たがられ、冷遇された過去を持つ。そのため、自らの能力には少なからず自責の念を持っている。男子生徒であるがために、学園の女子生徒からは羨望と興味の入り混じった視線を向けられることもしばしば。

【御坂 みさか 美琴 みこと】……第一章

15歳／レベル5／ベルカランクSS+

私立秋乃原学園3年生。高電圧の電撃を自在に操る超能力者で、エレクトロマスター「電撃使い」のあだ名を持つ「レベル5」の一人であり、学園内ではその名前を知らない生徒はほとんどいない。性格は直情的で行動的、言葉より先に手が出るタイプ。電撃の発生に効くらしく、よく炭酸飲料を口にかけている。また、手に高電圧をかけて磁場を発生さ

せ、指でコインを弾いて超高速で打ち出す特技を持ち、一部では「レベルガン超電磁砲」という異名で呼ばれている。ちなみに、学園の「レベル5」の中で、レベル1から努力でレベル5になったただ一人の人間である。

【白井 黒子】……………第一章

14歳/レベル4/ベルカランクS+

私立秋乃原学園2年生。空間を飛び越え別の場所に瞬時に移動できる「テレポート瞬間移動」の能力を持つ「レベル4」超能力者であり、いつも髪をツインテールにまとめている。御坂美琴の後輩にあたり、彼女を「お姉様」と呼び強く慕っている。その過剰な敬愛精神から少々無茶に走ってしまうこともしばしばあり、そのたびに美琴から喝を入れられている。しかし根は正義感が強く、学園の風紀・治安維持を担当する組織「ジャッジメント風紀委員」の一員である。

【平沢 唯】……………第一章

17歳/レベル4/ベルカランクC

秋乃原学園5年生。軽音楽部でリードギターとボーカルを担当する少女。性格は天真爛漫で子供っぽく純真。思ったことは即座に行動に移し、時に周りを振り回す。しかし本人は良かれと思ったがゆえに行動を起こしているため、当事者は迷惑をかけられても怒れなくなってしまう。超能力「絶対音感」の持ち主で、特別な練習なしに曲の音階すべてを聞き分けられる「レベル4」であり、超能力レベルだけなら軽音楽部一だが、本人の超能力を扱う技術が総じて低いこともあり、それが生かされることはあまりない。自分のギターに「ギー太」と名前を付けて可愛がっている。

【田井中 律】…………第一章

17歳ノレベル2・5ノベルカランクB

私立秋乃原学園5年生。軽音楽部でドラムを担当し、実質肩書きは部長である。しかし、その肩書きにそぐわずリーダーシップはいまいちで、性格は楽天的かつポジティブで大雑把であり、よく問題を起こし秋山澪にたしなめられている。どれだけの音が同時に鳴ってもすべて聞き分けることができる能力の持ち主だが、「レベル2・5」という能力の低さとその性格が災いし、それが発揮されることはほとんどない。また、何かのこだわりがあるのか、いつも頭に力チューシャをつけている。

【秋山 澪】…………第一章

17歳ノレベル3・5ノベルカランクAA

私立秋乃原学園5年生。個性的な面々が多い軽音楽部の中ではしつかりした常識人であり、成績優秀、暴走しがちな他のメンバーの歯止め役でもある。また、見たものを瞬時に記憶できる「瞬間記憶」を持つ「レベル3・5」能力者で、能力をコントロールする技術は軽音楽部一。その反面言葉遣いがなぜか男っぽく、性格はそれに似合わずかなりの恥ずかしがりやで、ベースギターの担当であるのそれが理由。しかしその言動とスタイルが相まって、学内では本人に内緒でファンクラブが設立されている。

【琴吹 紬】…………第一章

17歳ノレベル3ノベルカランクAA+

私立秋乃原学園5年生。キーボード担当の軽音楽部員。現在音楽室にあるティーセット一式は彼女が持ち込んだものである。性格はかなりおっとりしていてスローペースだが、何にでも興味を持ち、時として突拍子もない行動にすら出る。言動や持ち物のそこかしこに高貴さが見られ、何にでも興味を持つことから金持ちな家の生まれだという噂があるが、真相は謎。秋山澪と同じく、成績優秀かつ「瞬間記憶」を持ち、レベルは「3」。毎日軽音楽部にケーキやお菓子を持ちこんでおり、メンバーの活動の原動力となっている。

【中野 梓】……第一章

16歳/レベル3/ベルカランクA A

私立秋乃原学園4年生。軽音楽部で唯一の4年生であり、リズムギター担当。軽音楽部の中では最もしっかりした性格の持ち主で、暴走する5年生をよくたしなめるが、逆に無理やり引き込まれてしまうこともしばしばある。平沢唯からは、猫耳が似合いそうだという理由から「あずにゃん」のあだ名で呼ばれ、よくスキンシップをされて困っているが、まんざらでもない様子。念力で物を動かせる「物体浮遊」を持つ「レベル3」。肌が弱いらしく、半日陽に当たっただけで真っ黒に日焼けしてしまう。

【高町 なのは】……第二章

18歳/レベル4・5/ベルカランクS+

私立秋乃原学園5年生。「レベル4・5」の非常に高い能力を持ち、マインドブリンク「能力実化」という、超能力を三次元に形として実体化できる、

非常に珍しい能力の持ち主。その超能力は、「レイジングハート」という名の意思を持つ槍杖として現れ、「レイジングハート」を介して様々な超能力を行使できる。「レイジングハート」は、普段は赤い珠のアクセサリとして彼女が持ち歩いている。誰にでも優しく温和に接するが、怒らせるとヒステリックになり手がつけられなくなる。

【フェイト・T・ハラオウン】……第二章

18歳/レベル4/ベルカランクS+

私立秋乃原学園5年生。なのはと同じく「マインドブリンク能力実化」を持つ超能力者で、実体化した能力は「バルディッシュ」という名の斧杖として現れる。レベルは「4」でなのはより下ではあるが、「バルディッシュ」を介した能力の扱いの技術はなのはよりも上である。なのはとは同じ超能力同士、旧知の仲で、性格は内気で物静か。ちなみに名前の「T」は「テストロツサ」の略で、彼女の本来の苗字。「ハラオウン」が誰の苗字なのかは、なのはも知らないという。

【やがみ八神 はやて】……第二章

18歳/レベル4/ベルカランクSS

私立秋乃原学園5年生。なのは、フェイトと同じく「マインドブリンク能力実化」を持つ「レベル4」超能力者で、実体化した杖の名は「リインフォース」。生粋の関西弁を話す変わった人物で、なのは、フェイトとは親友だが、どうやら出自は二人とは異なるようである。芯の強い豪胆さと決断力を兼ね備えているが身体はいささか病弱で、周囲に心配をかけることもしばしば。その昔難病を抱えており、超能力によって自らの命をつなごうとして、逆にその超能力の意思によって

救われた過去を持つ。隠れた才能が開花するとなのはを超えるとか越えないとか。

【ゆり】……第二章

17歳/レベル3.5/ベルカランクAAA

私立秋乃原学園5年生。学園の非公式サークル「サバイバルゲーム部」の部長を務める少女で、負けん気の強い活発な性格をしている。「超速反射」と呼ばれる、瞬間的に全身の運動器官の反射速度を飛躍的に高められる「レベル3.5」超能力の持ち主。現在の学園の生徒会に不満があるらしく、よく学園内で反乱ともとれる事件を起こし、そのたびに生徒会長の立華奏と対立している学園の問題児。しかしその豪胆さとリーダーシップから、生徒からの信頼は厚い。「ゆり」は部でのコードネームであり、本名は謎。部の掟なのか、常に拳銃を携帯している。

【立華 奏】……第二章

17歳/レベル5/ベルカランクSS+

私立秋乃原学園5年生。学園の生徒会長を務める寡黙な少女で、学園史上初の5年生の生徒会長。物質を別の物質に変化させる「物質変換」の持ち主で、ヒロキを除いた学園の超能力者の中では彼女が最も高いレベルといわれる。その超能力の高さから、「レベル5」に分類される一人である。その外見から「天使」というあだ名で呼ばれており、これは見た目と同時に、生徒会への反乱分子を徹底的に叩きつぶす冷徹なまでのその行動を揶揄してつけられたものでもあるのだが、本人は全く気にしていない。ゆりとは犬猿の仲で

あり、よく事あることにもめている。辛いものが大好き。

【神崎・H・アリア】……第二章

15歳/レベル3.5/ベルカランクAAA

私立秋乃原学園4年生。非公式サークル「サバイバルゲーム部」に所属する少女で、ゆりと同じく「超速反射」を持つ少女。レベルは「3.5」。ゆりとは同じ超能力者でありクラブメイトでもあるがゆえに、友情を超えた固い絆で結ばれている。そのため、ゆりとのコンビネーションは抜群で、「学園中最も息の合った超能力コンビ」と評されている。拳銃のみを持ち歩くゆりとは異なり、実剣も隠し持ち歩いているため、コードネームは「双剣双銃」という。背と胸の小ささがコンプレックスで、指摘されると逆ギレする。

【峰 理子】……第三章

16歳/レベル4/ベルカランクS

私立秋乃原学園4年生。アリアと同じくサバイバルゲーム部の一員だが、幽霊部員。はっちゃけた性格の持ち主で、自らを「りこりん」とまで呼ぶほどの天真な少女。反面、スタイルは抜群で、本人もその自覚があるらしく、スタイルを気にしているアリアをからかっては楽しんでいたり、ほかの生徒を誘惑したりする。念力で髪を自らの手足のように操ることができる。感情の裏表がかなりハッキリしており、激情に駆られたりすると性格と口調が一変して凶悪度が増すが、その秘密を知っているのはごく一部の人間だけである。

.....
A
N
D
M
O
R
E
.....

世界設定

・秋乃原市について

主人公たちが住む町。代々超能力者ばかりが生まれる不思議な町で、しかも超能力を発言するのは何故か決まって女性という妙な法則も存在する。元々超能力者が多いため、超能力を持つ者には理解が深く、理解が行き届いていない都会などとは雰囲気は全く違う。

・私立秋乃原学園について

主人公たちが日常を送る学園。その昔、この町に住んでいた金持ちの超能力者の一族が、町の子供たちのために建てたと言われているが、詳しいことは分からない。もちろん、生徒は町の人間がほとんどで、それゆえに生徒はほぼ全員が女子生徒である。

授業は基本的なもの他、超能力を活かす授業も組み込んだカリキュラムが組まれている。寮が併設されており、身寄りのない転入生などはここで生活を送ることができる。在学年数は13歳から18歳までの6年間と割に長く、それがこの学園の信頼の根源ともなっている。

・「超能力」について

時として一部の人間が持つことのある不思議な力のこと。その効果や強さは人により多種多様。学園においては、管理上、生徒を超能力の精度・技術・強さなどからレベル1〜レベル5まで0.5区切りで9段階のレベルに分けている。ただしこれは、生徒間における

るトラブルを避けるために、あくまで目安として設定されたものであると言われている。

超能力の原理についてはまだ詳しくは分かっていない。現在、普通の人間と比べ、超能力者だけが、体内器官に、その器官を構成する筋肉から発生した不可視のエネルギーが蓄積されていることが分かっており、これが超能力のパワーの元なのではないかと言われている。これを超能力として発揮する原理については諸説あるが、今のところ、「脊髄の神経を介して脳がエネルギーの流れを把握し、そこから脳が、その者の使用する超能力の類に応じて各体内器官に働きかけ、もつともその使用に適した器官を活発化させることでエネルギーを超能力に変換する」という説がもつとも有力である。

・「ベルカ式評価法」

秋乃原学園で評価に使われるレベル1から5までの10段階評価に対し、EランクからSSSランクまでの14段階評価「ベルカランク」で行われる評価法。編み出した研究者の名前をとってこの名がついている。秋乃原以外の施設などではこの方法が使われていることも多い。学園の評価法より細かいランク付けが可能ではあるが、その分データ処理の際などに手間を要することから、学園では不採用となった。そのため、学園の評価レベルとは必ずしも一致しない。ちなみに、学園の評価方式が「能力エネルギーの強さ」を基準とした評価であるのに対し、ベルカ式は「超能力を扱う技量」を基準とした判定であるため、高町なのはと八神はやてなどのように、二つの評価を比較すると一方の評価に対してもう一方の評価の順位が逆転してしまうといった例がみられる。

軽音楽部と電撃使用の場合？

「放課後、一緒にお茶しない？」

クラスメイトでこの学園の軽音楽部に所属する平沢唯から誘われたのは今朝のことだ。

軽音楽部がこの学校にできたのは割と最近のことらしく、俺もその存在は知っていたが、この町で暮らしていて話題を聞いたことはほとんど無い。

しかし、気になるのは誘い文句だ。

「一曲やらない？」ならばまだわかるが、「お茶しない？」というのはどう考えても軽音楽部のテーマと結びつかない。

綿をちぎって撒いたような雲の浮かぶ青空を眺めながら、俺は一人その謎を考え込んでいた。

以前から部活動へのオファーはたびたび来ていたのだが、女子生徒が構成するチームに男子が紛れ込むとバランスを崩すのではないかという心配があつて、俺は全ての運動系部活動に対し、不定期での助っ人という形で参加を認めてもらっている。

だが、軽音楽部に限ってそんな心配は無用だろう。

運動部はほとんどが俺の体育能力を目当てに誘ってきていたが、

まあ文化系部活ならばそんなことは無いに決まっている。

ちょうどこの日はシフトも無かったため、俺は行ってはみるかと思っただが、今はまだ正午を回ったところだ。

放課後まではまだかなり時間がある。

どうやってあと数時間をつぶそうかと考えながら、頭の横に置いておいた二缶目のアイスコーヒーに手を伸ばす。

そのとき、横に誰かが立っているのに気がついた。

真新しい革靴。

見上げると、学園の中でも飛び抜けて短いミニスカートの制服。

そしてなぜかスカートの下に白い短パン。

こんな奇抜きぼつな格好をしているのは学園の中でも数人しかいない。

まして、スカートの下に短パンを履いているとなれば一人しかない。
ない。

「……………御坂か」

「あはは、よくわかったわね」

「スカートの下にそんなもん履いてるやつなんて、この学園じゃお前しかいないだろが・・・」

「まあ・・・そりゃそうだけど・・・とりあえず、お邪魔しちゃっていい？」

「なんだ？ おまえも授業抜けてきたのか？」

「まあそんなとこね」

「・・・俺の安らぎを邪魔しなければ構わないが」

「やた サンキュー」

そういつて彼女は俺の隣に座り込むと、持ってきた炭酸飲料をぐいっとあおった。

彼女は御坂美琴。

数年前にこの町に引っ越してきた超能力者。

もちろん引っ越してきたといっても、自らの意思でここにやってきたのであって、人さまの都合でここに来させられた俺とは違う。

学園内でも指折りの超能力者で、電気を自在に操る「エレクトロマスター電撃使い」
として有名、しかも見た目からわかるとおり、お嬢様だ。

だが本人は、とうていお嬢様たる性格ではないのはよくわかるだ

ろう。

「…………お前、よくそんなもん飲めるな……」

缶を見ると、「黒豆サイダー」とある。どう見ても不味そうにしか見えない。

「私は炭酸飲料なら何でもオツケー。こういうスカツとしたのが、電気の起こりが良くなるのよ」

「……………そういうもんなのか」

炭酸飲料が電気に利くとは初耳だ。

「そういうアンタこそ、そんな親父くっさいもんばかりね」

「ほっとけ、俺はお前ほど電撃を使うのは上手くねんだよ」

「まあ、そりゃそうよね〜」

「同じ超能力者でも、単一の能力でレベル5のお前と、能力数評価でレベル5の俺を一緒にすんな」

飲もうとしたコーヒーが温くなっているのに気がつき、俺は手から冷気を発して缶を冷やした。

この学園では、超能力者は管理の性質上、その能力の精度、威力などから5つのレベルに分けられている。

超能力者という呼称こそあれ、そう呼ばれるのはレベル5の人間だけで、それ以下だと単に「能力者」という呼称しか使われない。

当の生徒たちの間では、そんなことは全く気にされず、すべて「超能力者」という呼称で通っているわけだが。

美琴はそんな俺の冷気発生能力を見て興味を引かれたような目をして、

「アンタ便利な能力よね、それ・・・」

「・・・貸さないからな」

「いや、別にいいけどさ・・・アンタ、そういう沢山能力持つこと、自慢に思ったりとかしないの？」

美琴は素直な質問を投げかけてきた。

「・・・いや、そういうことはないな・・・むしろこういう複数能力持ちは妬まれても不思議じゃないからな、今までそういうことも多かつたし、あんまりいいとは思わない」

「・・・そっか・・・ってことは、アンタ、私と違って努力でそこまで上り詰めたって訳じゃないってこと？」

美琴の眼が「そうなの!？」とでも言いたげな眼だったのが多少気に入らなかつたが、俺は見なかつたことにした、

「今頃気づいたのか? というかそれ以前に鍛錬で新しい超能力を

得られるんだつたら、とつくにここの全員が複数能力者になつちま
つてるさ。俺はもともとこれだけの超能力を持って生まれてきた。
……まあ、ガキの頃は使い方をわからずによく力を暴発させちまっ
たことはあつた……それを使いこなすまでには、まあお前と同じ努
力というか訓練てのは必要だつたがな」

「へ〜……いろいろと大変だつたのね……」

「……ああ、もしかすると、お前よりももつと大変かもし
れない、苦労という言葉じゃ収まりきらない、辛い過去がな……」

「辛く苦しい過去……か……」

美琴は空を見上げながら遠くを見つめて思い返すようにつぶやい
た。

レベル1から独力でレベル5にまで登り詰めた美琴のことだ、何
か思い当たるといつか、共感し得る部分があるのだろうか。

向こうでは、ちょうど午後最初の授業の終わりを告げる鐘が鳴っ
たところだつた。

軽音楽部と電撃使用の場合？

太陽が西に傾き始めた頃、ようやく授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

たちまち屋上直下のグラウンドでは、白球の打撃音やスタートの合図のホイッスルが鳴り始める。

俺は重い体をゆっくりと起こし、音楽室へ向かおうとする。

「……どっか行くの？」

美琴が眠たい目をして聞いてきた。

「……ああ、なんか今朝軽音楽部から部活見学のオフアーが来てる……」

「そうなんだ……私も行くのかな……」

「お前もか？」

「だって暇だし。これ以上こんなところで昼寝するのもつまんないから」

「まあ……聞いてはみるとしますかね……」

音楽室は屋上から割と近い。

屋上への出入り口を出て通路を右に曲がればすぐのところにある。

コンコンと音楽室の引き戸を叩く。

・・・が、返事が返ってこない。

「あー！・・・」

声をかけてみるが、やはり返事はない。

戸に耳を当てて聞いてみると、中に人はいるようだった。

「誰がいる？」

「いるにはいるみたいだが・・・妙だな」

「へ？」

美琴はそう言って同じように戸に耳を当てる。

中からは、

「うわはぁー・・・こんなの見たことない」

「ほ、ホントにもらっていいのか？」

「どっぞどっぞ、遠慮なく」

などという会話が聞こえていた。

「どっこういうことだ？ 誰も出ないなんて」

そう言いつつ美琴の方を見ると、当の美琴は冷や汗を流している。

「どっ、どうかしたのか？」

俺がおろおろしながら聞くと、

「……………ごめん、私の身内が厄介になってるみたい……………」

「はあ？」

美琴は引きつった顔をしながら戸に手をかけた。

……………

「ほんっとうに、すいませんでしたっ！……！」

軽音楽部員から頭を下げられる。

「この度は、先輩方がご迷惑をおかけして……………」

先輩方ってことは、この子は後輩部員なのか。

なんで後輩が先輩の代理で頭下げてるんだよ……………。

しかも、当の「先輩方」は、未だにそれを気にもかけず、テーブルの上の何かに見とれたままだ。

「アンタも謝りな・さ・い!!」

美琴が強引に頭を下げさせているのは、彼女と同じなりをした、美琴より年下の少女。

「ごめんね……………うちの馬鹿が引き金を作っちゃったみたいでさ……………」

美琴は苦笑いをしながらその少女の首をホールドする。

「ぐるじい……………お姉様あ……………降参ですの……………」

「おいおい、それぐらいにしとけよ……………死ぬぞ」

俺は半ばあきれながら、机の上を食い入るように凝視し続けている。「先輩方」の方を見た。

「ちょっと皆さん！？ホントに悪いと思ってるんですか！！？」

俺の視線に気づいた先ほどの後輩部員が叫んだ。

その叫び声に、その中の一人がようやく気づく。

「お、おい、来てくれたやつに迷惑だぞ」

「もうちょっとだけ」

他の三人は声をそろえていう。

そうしているうち、ついに

「自覚しろ、よっ！！」

最初に気づいた少女の鉄拳が炸裂した。

.....

「.....しゅみましえんでした」

三人は殴られた頭をさすりながら頭を下げた。

「……………いや、なんかもうどうでもいいからいいけど……
にしたって釘付けになってたのが……」

俺は呆れながらテーブルの上のそれに視線を移す。

色とりどりのケーキとスイーツ。

「……………これだもんなあ……」

どう考えても軽音楽部に似つかわしくない。

「……………で、コレを持ち込んだのが」

「……………はひ、わらくひれふ」

御坂美琴に頬をつねられながら言ったのは、先ほど美琴にホール
ドされていたツインテールの少女。

「……………すまん、とりあえず、最初に話を戻してくれないか」

「あ、ああ……すまない……自己紹介がまだだったな、私は秋
山澗、ベース担当だ……ほら、お前たちも早く」

「はいはい、同じくギターだけドリードとボーカルやってる平沢
唯……ってまあ、君とは同じクラスだから言わなくていいか」

「はい、キーボードの琴吹紬です、いつもは私がお菓子準備し

てるんだけど、今日は要らなかつたみたいね。」

「そしてっ、このアタシが、ドラムの田井中律様だぜい！！ あ、一応肩書きは部長な。」

「ど、どうも、リズムギターの中野梓です・・・今年度に軽音部に入部しました・・・。」

一通り紹介が終わったが、俺はその面々に言葉が出ずにいた。

個性的、個性的すぎる。

なんてコメントしたものが、と必死に考えを巡らしていると、

「ん？ そういえばそのお菓子を持ち込んだ御仁は・・・。」

「あ、申し遅れましたわ、白井黒子と申しますの。以後お見知りおきを。」

見た目の服装は美琴と変わらないが、口調はほぼお嬢様のそれだ。

「それで、なんでお前は今日ここに来てたんだ？」

「ああ、以前、琴吹さんにある仕事でお世話になりました・・・そのお礼をと。」

「でもでもっ！！ なんか黒子ちゃんがケーキを私たちにまでくれ

るって言ってね!!」

唯に至っては完全に目がケーキだ。

「そんなに喜ぶもんなのか？」

「当然だよ!! 私たちの財布のお金だけじゃ、一生に何回食べられるか分かんないんだよ!!」

言われて、テーブルの上のケーキを見る。

この独特な飾りつけの仕方には見覚えがあった。

「これってまさか…町の商店街にある高級洋菓子店の…」

「ええ、パスティツチェリア・マニガーニの特製ケーキですわ」

やっぱりか、と俺は思った。

ケーキの1ピースでも値段は4ケタを超えるあの店のケーキをタダで食べられるとあっては、そりゃ目をキラキラさせたくもなるだろう。

理由がようやくわかり、あきれ半分、落ち着き半分の俺は、結局、

黒子がケーキを買いすぎて余らせるのがもったいないという理由で、一緒にケーキをいただくことになったのだった。

軽音楽部と電撃使用の場合？

「なあ、そういえば平沢、今日ここに俺を呼んだ理由は何なんだ？」

ケーキの問題云々ですっかりここに来た理由を聞くのを忘れてしまっていたことに気がついた俺は、慌てて本題を切り出した。

「あ、そうだった、ごめんごめん」

「そういえば、私たちも聞いてなかったな……」

「なんだ？ 全員聞いてなかったのか？」

唯以外の全員がうなずいた。

「それはね〜それはね〜、部室の片づけを手伝ってもらいたいんだよ〜」

「……………はあ？」

「えええええ！？」

その場にいた全員が驚愕した。

「まさか、まさか……」

「だろ、なんか都合のいい」

「唯が自分から片付けたいと言い出すなんてっ!!」

「そっちかよっ!!」

思わずつつこみを入れずには居られなかった。

「いやいや、もっと他に言うことあるだろうが!!」

「あああ、そうだった…すまない」

澪はばつが悪そうに苦笑いをする。

「唯、お前な、掃除のためだけに他人を連れてくるのはあまりにも失礼じゃないのか？」

「ほえ？　なんで？」

「なんでって……」

唯本人は何が悪いのかまったく分かっていない顔をしている。

「だって、大倉君でいろんな超能力持ってるんでしょ？　だった

ら「つくらい片付けに役に立つのがあるんじゃないかなって思って
……」

……………怒れない。

澪も完全に怒る糸口を封じられてしまって「うぐぐ」「とうなって
いる。

子供っぽい理由というのは怒れないものだと思えて実感した瞬間
だった。

本人が全く悪気がなく、純粹に手伝ってもらいたかったという理
由だけで連れてこられたというのは、いささか不本意だが怒れない。

「……………仕方ねえな…分かったよ」

「わあ、ありがとね〜」

……………むう、そんな満面の笑顔で言われるともう完全に怒れない。

「……………で、いいか」

準備室は確かに足の踏み場がないほど散らかっていた。

あちこちに軽音楽部の活動とは到底関係がなさそうなブツが左右所狭しと押し込まれ、肝心の楽器に関する調律器具やメトロノームや楽譜やらは隅で小さくなっていて、どう見てもここが音楽準備室だとは思えない。

……今まで授業で使っててよくバレなかったな、これ。

「それで？ この関係ないブツを全部出せばいいのか？」

「そうしてほしいな」

澪以外の部員全員が後ろでぶつぶつ文句を言っていたようだったが、澪に睨まれしぼんでいたのが見えた。

「……やれやれ……とっとと終わらせちまうか」

俺は部屋の中を見まわし、頭に念を集中させる。

すると、途端に準備室の中にあつたヌイグルミやオモチャがゆっくりと浮き上がり、ふわふわと漂いながら部屋の外へ退出していく。

全員が「おおー」と感心した顔でその様子を見ていたのに気付き、

俺は釘をさす。

「感心してる場合じゃないぞ、割れものを壊したくなくれば受け取れ」

丁度準備室の奥にしまわれていたティーセット一式が部屋を出たところだった。

全員が慌てて一人一人分のカップと皿を手取る。

取られなかったティーポットをテーブルの上まで誘導させると、俺は残りのガラクタの移動にかかる。

又イグルミは音楽室に何故かおかれていた背もたれつきの長椅子の上に積み上がって、みるみるうちに山を作っていく。

何やら得体のしれないものが入った段ボール箱は、ブロック塀よろしくぴったり乱れなく積み上がって整列する。

たつぷり五分は力を使ったかというところで、ようやくそれらしいガラクタは準備室の中に見当たらなくなった。

俺はくたくたになって長椅子にへたり込む。

物体移動ムービングのような、エネルギーを他の物に集中させるような超能

力は、その性質上、体力の消耗が激しい。

五分も使えば、体育で千メートルを全力疾走したのと同じくらいの疲労感が襲ってくる。

「だ、大丈夫か？」

肩で息をしている俺を見かねて、心配そうに漕が訪ねてきた。

「だ、大丈夫だ…これくらい…なんてことない」

あえて強がりを書いて見せた。

正直今は歩き出せないほどの疲労感にさいなまれていたが、余計な心配はかけられないのでそう言うしかなかった。

「ちよつとちよつと、アンタ大丈夫!？」

先ほどから黒子とトイレに行くといつて外に出ていた美琴が戻ってきたらしかった。

「なんでもない…ちよつとした超能力の使いすぎだ…」

美琴は疲れ切った俺と、さっきまでなかった又イグルミの山と段ボール箱の壁、そして開け放たれたままの音楽準備室の扉を見て、状況を察したらしく、

「なるほど？　じゃあなんか飲み物買ってきてあげよっか？」

「……頼んだ」

「りょーかいつと、じゃ黒子、ちょっと連れてってよ」

「了解ですのっ！..！」

そう言つと同時に二人はぱつと消え、ものの十秒ほどでまた戻ってきた。

手にはやはり炭酸飲料の缶が二つ、今度は「ヤシの実サイダー」と書いてある。

まあ、前の「黒豆サイダー」よりは飲めなくもなさそうだったので、俺はとりあえず受け取っておくことにした。

缶に口をつけてみる。

今まで飲んだことがないような何とも言えない味だったが、新鮮ではあった。

とりあえずは、このシュワシュワ感と冷たさが、疲れ切った身体には何よりの癒しだった。

軽音楽部と電撃使用の場合？

「ほ、ホントに大丈夫……なんだよね？」

力を使い果たして疲れ切り、肩で息をする俺を見て、さすがに責任を感じたのか、唯はしきりと俺の様子を気にかけてくる。

気にかけてもらえるのはありがたいのだが、俺をこの疲労という果てしない束縛に誘い込んだ張本人に心配されると素直には喜べない。

「……………おかげさまで」

意味もなく労働を肩代わりさせられた意趣返しに、あえて俺はそう返す。

疲れた疲れたと愚痴ばかりこぼしそうになっている自分が情けない。同時に自分の嫌みったらしい性格もバカバカしいことだ。

「しっかしさあ…なんで音楽室にこんな大量のヌイグルミがしまつてあるわけ？」

傍観していた美琴が聞いてくる。

「俺に聞くなよ……持ち込んだのは軽音楽部の連中だからそつちに

」

そこまで言っつて、俺はふと一つの考えを思いつく。

首をかしげる美琴をよそに、向かい側の長椅子にうず高く積み重なったヌイグルミに意識を集中する。我ながら疲れているのによくやれたものだ。

途端に、ヌイグルミは空中に浮かび上がり、次の瞬間には、まるでスキヤンダルでメディアを騒がせる政治家に群がる記者のごとく、我先にと持ち主……つまりは軽音楽部員の元へ殺到する。

「わああっ!?!」

「ひゃあああ!?!」

軽音楽部員たちは悲鳴を上げながらも、飛びついてくるヌイグルミを受け止める。

「どっやったの……あれ」

ポカンとした顔で美琴が尋ねてくる。

「何のことはない、モノに込められた意識を読み取っただけだ。そしてあいつらに、持ち主の元に飛びつけて命令した」

淡々と説明をする。

そして、ヌイグルミの山が長椅子の上からなくなったとき。

「おととっ、とと、とっ、とおおおお」

ズテツという間抜けな音を立てて、一番多くのヌイグルミに飛びつかれた唯が、その多さを支えきれず、尻もちについて転倒する。

同時に、そこにいた唯以外の全員から、白々しい視線が唯に向かって一斉に注がれる。

「あつづつ……」

唯は何とも情けない声を出して、それっきりしょげてしまった。

「……言っておくが、お前らも同罪だぞ」

いかにも他人然とした視線を送る他の部員に対して、俺は念のため釘をさしておいた。

四人ともが、オロオロしていたのは言うまでもない。

それからというもの、すっかり落ち込んでしまった唯を励ますのに、さらに半時間ほどの時間を要した。

体力的に限界だった俺には、もう当の昔に精神的な負担まで負う余裕は残っていなかったが。

音楽室の空気がすっかりグレーになってしまっていた。

「……ねえ」

半時間の間中、口をつぐんでいた美琴が、不意に俺に話しかけてくる。

「なんだ」

「私も、ちょっと音楽的なことしちゃっていいかな？」

「は？」

質問の真意を計りかねて、俺は思わず聞き返していた。

「黒子、取ってきてくれない？」

「かしこまりました」

黒子は意気揚々として音楽室から消え、ものの数秒もしないうちにまた戻ってきた。瞬間移動の早さにはいつもながら恐れ入る。

その手には、何やら黒いカバンのようなものが提げられていた。

中身の推測をできずにいた俺を横目に、美琴はそのカバンもどきを開封する。

中から出てきたのは、ニスも真新しく艶光するバイオリンだった。

ようやく質問の意味を理解した俺に、美琴は得意そうな顔をした。

「意外？」

「……意外だな」

認めざるを得ない。

机を隔てた向こうでは、未だに軽音楽部のメンバーが灰色の空気に包まれたままでいる。

美琴はバイオリンの弦を弓で軽くこすってキュツキュツと音を出し、それを聞いて異常なしと判断したのか、そのまま演奏し始める。

聞いたことのない曲だった。

しかし、不思議な温かさを感じた。

心に温かい感情が湧いてくるのはいつ以来だろうか。

向こうで俯き加減でいた五人が、ハツとした顔で美琴の方を向いた。

誰一人として声は挙げなかったが、その心中はいかほどか。

いつもの音楽室に流れる音楽とは、旋律も雰囲気もまるで違うその曲に、その場にいた全員が聞き惚れたような顔になっていた。

俺の脳裏に、記憶の断片が蘇る。

幼かった俺に、笑顔を見せる、名前も知らない誰か。

俺が元いた地を去る前に見た、最初で最後の記憶。

今まで脳の奥底に沈められていたその淡い記憶を呼び起こすほどに、その曲はあまりに神秘的で、美しく、悲しく、そして暖かだった。

演奏が終わると、その場にいた全員から、パチパチという、やや遠慮がちな拍手が送られる。

「……………すげえな」

「私だって、伊達にお嬢様してるわけじゃないわよ…まあ、ホントはこんなこと覚えなくてもよかつたんだけどね」

「すごっ、いいよおお…じゃなくっ、なくてえっ、ありがとっ…違うっ、ごめっ…あああ…」

「ちょ、ちよっと、唯先輩ったら」

唯に至っては、感動と今までの責任感がごちゃ混ぜになり、感極まって号泣し始めてしまっている。

必死に唯を慰める他のメンバーを見ながら、俺はふと、疲れがすっかり取れてしまっていることに気がついた。

病気は心の持ちようだとかよく言うが、それはどうやら身体的疲

劣にも言えることだったようだ。

たった一曲聞かされただけで、ここまでになるとは、美琴の演奏技術の賜物か。

いや、違う。

温かさを忘れていた、俺の心がもたらした結果だということか。

「よし、私たちも負けてられないよ!!」

「おお　っ」

さっきまで泣きっ面だった唯が、打って変わって対抗意識を燃やしている。

つくづくポジティブなやつだ。

瞬く間に音響機器のセッティングが終わり、律のタイミング取りに続けて演奏が始まった。

いつもは派手さしか感じなかったこの演奏が、今日はなぜか不思議

議と温かみを感じたのは気のせいだろうか。

いや、多分気のせいではない。

心が温かい人間ほど、言葉に込められた感情を理解しやすいと聞いたことがある。

真実かどうか正直疑わしかったが、まさか今日ここでそれを身を持って知ることになるうとは。

その日、音楽室を出てからも、その温かさはずっと消えることはなかった。

翌日。

再び屋上で放課後を過ごす俺。

下からは歓声とともに、昨日聞いたあの曲が聞こえてくる。

今日中庭でゲリラライブをやると言っていたが、どうやら昨日聞いた曲は今日ここで披露する予定の新曲だったようだ。

「行かなくていいの？」

今日も俺の隣で暇を持て余していた美琴が聞いてきた。

「人が多いからな」

建前をあえてそう言っておく。

「お前は行かないのか？」

「アンタと一緒にあの曲は昨日聞いたしね」

美琴はそう言いつつも、流れてくる曲に耳を傾けている。

西に傾きかけた太陽が、心地よい暖かさを屋上に提供してくれて

いる。

新曲を一足先に聞いていたという優越感と、昨日の心の温かみがほのかに残っているのを感じながら、俺はその気温に少しだけ眠くなる。

下の中庭では、そんな俺など知らずに、ヒートアップし続けるゲリラライブが、時折混じる唯や漣のMCを交えながらいつまでも続いていった。

今日もまた、日常は平和に変わりなく過ぎていく。

それは、終わりのない、さながら永遠に続くアルバムのページをめくるようなものである。

武装少女と魔法少女の場合？

「たああつ、あ、あわわつ！？」

グラウンドに女子生徒の間抜けな悲鳴がこだまする。

「……………」

キャッチャーからボールを受け取りながら、俺はバッターボックスに向けて呆れかえりにも似た、というかむしろ呆れそのものに近い視線を送る。

今、俺はグラウンドの真ん中にあるマウンド…というにはややお粗末な場所に立っていた。

何故ここに居るのかといえば、それは今日がたまたまソフトボール同好会の助っ人に駆けつける日だったからにすぎない。

だが、個人的なことを言わせてもらえば、いつも少々物足りなさを感じているところではある。

無論、物足りなくとも、手を抜かなければ肝心の部員がついてこられなくなってしまうので仕方ない部分はあるのだが。

しかし、今日はいつものそれに輪をかけて物足りない…というよりは、物足りなさを感じている余裕もないほどに、それを上回って余りある呆れの感情があったからだ。

原因はといえば、俺と同じく助っ人として来ていたある人物の発言だった。

「高岡君が相手とはなあ…せつかくや、本気で来^きいや」

八神はやてと名乗るその女子生徒の一言によって、俺は今日、手を抜くことは出来なくなってしまったのだ。

「いいのか？ 本気でやるぞ？」

「ええで、いつでも投げえ」

関西弁バリバリの勝気なその少女に挑発され、俺は手を抜かずに（と思われる程度のレベルで）投げた。

途端、俺はその挑発がはったりではないことを思い知らされた。

外角浅目に切れ込んだそのボールは、いとも簡単にバットに捕えられ、軽々とグラウンドの真ん中で練習している陸上部やテニス部の頭上を飛び越えて、グラウンド反対側の防球ネットに直撃した。

公式試合だったら、間違いなくホームランになる打球だった。

ダイヤモンドを一周して歓声を上げて迎えられる今日のMVP候補を見ながら、俺は久しぶりに真面目にやってみようかと思いついた。

……立ったのだが、そこからは正直呆れ返るしかなかったのだ。

八神はやてが、今日の練習試合の全球を手抜きなしでやれという意味で真面目にやれと言ったのかは定かではないが、彼女の後に続くバッターにもとりあえずいつもより強めに投げてみたまでは良かった。しかし、彼女以降のバッターは、まるで一瞬にして今までのセーブデーが全部リセットされた初期レベルのゲームキャラのごとく空振りの連続で、結局向こうのチームの点は、それ以降八神はやてが入れた一点から増えることが無かったのだ。

俺はもはや期待することをあきらめて、いつも通りの投げ方に戻そうとしたのだが、八神はやてが打ち返したのに続けと言わんばかりに、速球希望のリクエストばかりが殺到し、結局俺は、相手チームが打てるはずのない球ばかりを投げることになったのだ。

どう考えても、これではゲームを始めたばかりの初心者と、ゲームを始めて半年のゲーマーが対戦するようなものである。

一方的な結果になることは、火を見るよりも明らかだ。

むしろこれで八神はやて以外の誰かが打ち返せようものなら、もはや奇跡とでもいえるだろう。

だが、俺はここでまたしても、その見解が甘かったことを思い知らされる。

半ば投げやり気味に投げたボールが、キインという快音を立てて鮮やかに放物線を描き、マウンドを隔てたトラックの反対側に打ち返された。

慌ててバッターボックスにもう一度視線をやると、そこに居たのは、7番バッターだが背番号18のユニホームをつけた、つまりはまたしても代打のバッター。

一軍メンバーを完封しながら、二軍ですらない代打に打たれまくるピッチャーなど、一体どこの世界に居るのだろうか。

だが、自慢じゃないが、俺が本気を出して投げようものなら、反射的に掌から風や電圧が漏れ出たりして、思わぬ剛速球や変化球を

投げかねない。

実戦に有意義であるならともかく、そんな球を投げられる相手など俺以外に居る可能性はゼロに近い。まあ、居ないとは言わないが。

そして、野手が慌てふためいてボールを追いかけている間に、その背番号18の代打バッターは、女子生徒としては頭一つ抜きんできた脚力で、あつという間に三塁まで進軍した。

これ以上ツラを汚されたくないと思っていた俺に追い打ちをかける8番バッターは、またまた代打。

一体このチームの采配はどうなっているのだろうか。

スタメンは俺のスタミナを削るための単なる捨て石で、本命のポイントゲッターは代打バッターだともいう気が。

「……………なめやがつて!!」

俺は苛ついて、これでもかとはかりにキャッチャーミットめがけて全速力の球を投げつけた。

「うひゃあ!?!」

すると、代打バッターは、打ち返すつもりだったと見えて、バットを思い切りフルスイングして空振りしてしまい、その弾みでバッターボックスに尻餅をついてしまった。

「あいたたた……」

バッターがやってしまったとばかりに呻く。

刹那、ヘルメットが落ち、同時にその下に隠されていた美しい金髪がふわりと風に広がった。

俺は、その姿に見覚えがあった。

「…お前は……！」

「は……ははは……ばれちゃったか」

金髪バッターは正体を内緒で通すつもりだったと見え、やや自嘲するように苦笑した。

彼女の名はフェイト・T・ハラオウン。

フルネームで言うとフェイト・テストロッサ・ハラオウン。

学園の中では、その見事なまでの金髪がかなり目立つ風貌をしているが、本人はその外見とは裏腹に控えめな少女である。

「う…ごめんね…騙すつもりはなかったんだよ？ただ……」

そこで彼女の言葉が不意に途切れる。

何やら泳いでいる彼女の視線の先に居たのは、先ほどの背番号1^{8。}

「……………」

状況が一瞬にして理解できた。

バッテリーボックスに入る前から、妙にヘルメットを深く被り、顔が見えなかったあの代打。

フェイト、そしてはやて、この二人がここに居るといつことは…。

俺はつかつかと素早くそのバッテリーに近づき、たじろいでいるその頭のヘルメットを強引に奪い取る。

「あ、あはは……わかつちやった？」

「お前らは……」

特徴的な長い栗色の髪をたなびかせた、長身でモデル体型の少女がそこに居た。

「何してるんだここで……高町なのは」

それが彼女の名だった。

なぜ分かったかといえば、フェイトとはやてがいれば、そこには必ず彼女がいたからだ。

ただでさえ金髪で目立つフェイトの傍にいて、しかも長身の彼女のこと、印象に残ってしまうのは当然と言えば当然だった。

「なんや、バレしてもたんかいな」

はやてがいつの間にか傍にいた。

この三人になら、俺のゆるゆる手抜きの球など軽く打ち返されて当然だ。

なぜなら、この三人は少し変わった超能力の持ち主だからだ。

.....

.....

『マインドブリンダ能力実化』。

それが彼女たち三人に備わった超能力だ。

超能力とは、普通、そのエネルギーが能力者の体内にあることで行使できるのだが、彼女たちの場合は別なのだ。

彼女たちは、超能力の元となるエネルギーが突然変異を起こし、体外に形となって現れるという、極めて稀な人間なのである。

つまるところ、「能力実化」は、厳密には超能力とは言えない。

今までの記録によると、「能力実化」を獲得した人間は、エネルギー

ギーが形となって現れたらそこで終わりであり、せいぜいその「形となったもの」を介して、他の能力者にエネルギーを分け与えることくらいしかできなかったのだ。

しかし、彼女たちは「能力実化」の能力者の中でもさらにレアなものとい、今まで見られなかった特異な能力を持ち合わせている。

先に述べたが、「能力実化」で形となったエネルギーは、能力者の状態には影響されるものの、例えば未来が見えたりとか、物を浮かせるなどの力を発揮したりすることはなく、エネルギーを放出するだけのものとなって、そのエネルギーを触れたものに分け与える程度の効果しか持たない。

なぜなら、「形となったもの」がエネルギーそのものであり、そのエネルギーを練り上げて超能力として使う能力者からは完全に独立してしまっているからだ。

だが彼女たちは、そのエネルギーと身体との繋がりが断ち切れておらず、「形となったもの」を介して超能力を行使できるという、極めて高度な超能力を有しているのである。

何故そうなったのかは未だ謎のままなのだが、一説として、彼女たちが形としたエネルギーはどういうわけか意思を持っており、能

力者本体の意思に忠実であることが特筆されている。

つまり、超能力が発現する前の過程で、超能力のエネルギーに能力者の人格の一部が融合して意思を持ち、超能力そのものが独立した意思を持ちながらも、能力者の意思に忠実に従うようになった…ということなのかもしれない。

さて、説明はこのくらいにして……。

結論から言おう。

彼女たちは、ボールを打つのに、その能力を行使したとしか考えられない。

もちろん、外部に見えるような能力を放ったとかいうわけではなく、要するに「能力を形にして行使した」だけであろう。

先ほど速球をフェイトが空振りしたことや、なのはの走塁の様子からみて、彼女たちそのものの運動能力は、人並みにあるかそれよりやや上といったところだろうか。

だが、恐らく、彼女たちは超能力を使っていたに違いない。

超能力を「バットの形」にして。

だからこそ、あの程度の手抜き球ならいとも簡単に打ち返せた。

そして、本気の球をフェイトは空振りした。これはつまり、その球が彼女の能力で対処できるレベルを上回っていたということになるのだろう。

いずれにしても、反則技だ。

「わ！？ちょ、ちょっと!?!」

俺は三人にまとめて文句を言おうと、なのはの手をひつつかんで、フェイトとはやてがいるホームベースへ強引に連行する。

武装少女と魔法少女の場合？

「……で？ 飛び入り参加して俺をボコボコにしようとした魂胆をお聞きしたいのですが？」

濃度がもうちょっと高いと明らかに目が横線になりそうなほどの呆れ成分を含んだ視線を三人に向けながら詰問する。

「なんか楽しそうやったし」とはやて。

「は、はやてがどうしても言うから……」とフェイト。

「はやてちゃん、止めたんだけど聞かなくて……」となのは。

俺の視線がはやてに照準を合わせたのに気づき、はやては慌てて反論する。

「なんやて！？なのはやって退屈やしなんか面白いことないかて言うとったやないか!？」

「ええ！？言い出したのははやてちゃんでしょ!？」

「ふ、二人ともやめようよ……」

フェイトが仲裁に入ろうとするが、

「フェイトは黙ったとき！意気揚々と参加しといてよう言っわ!」逆

にはやてに噛みつかれた。

「ええ！？だ、だから誘ったのははやてで、私は仕方なくだって言ってるのに！」

「そうだよ！無理やりフェイトちゃんを試合に引き込んでいて！罪をなすりつけるの！？」

「なのはまでウチのせいにするん！？ええわええわ、あんたら仲ええもんなあ？」

「はやてがもはや逆ギレともとれる返答をする。」

「それは関係ないでしょ！？仲いいのはもともとだよ！！大体後から私たちの間に割り込んできたのはやてちゃんじゃないの！」

「なにを！？ウチがちよつと胸小さいからって二人で仲間外れにして！」

「む、胸は関係ないじゃないか…！それに、私だってなりたくてこうなっただけじゃ……」

「嘘つきいや！どーせ育ちのいいとこなんやろ、遺伝やろ、体質やろ！？」

「……………」

完全に当人そっちのけで話が進んでいく。

「というか話の内容が関係あるかどうかも、もはや怪しい。」

「……えーと、とりあえず力づくで止めちゃっていい的な感じか？」

それとなく問いかけてみるが、返ってくるのは怒声ばかりで返事は無い。

返答なしを俺は肯定と判断した。

「オーケー、それじゃあ、キツイ一発…食らっていただき…ますよっ…！」

同時に両手を三人の方に向けて振りかざす。

刹那、掌が一瞬白光を放ったかと思うと、そこからバチバチという突発音とともに電撃が迸る。

そして、その電撃は、狙い変わらず三人に直撃した。

…

……………

「はい、謝罪の言葉は？」

『……………した……………』

「声が小さい!!」

『申し訳ありませんでした!!』

やけくそ気味に三人の声が綺麗に八モる。

半ば無理やり言わせたようで若干罪悪感はあるが、まあお互いさまということにしておこう。

あの後も、なのはとフェイトは頑なにはやての責任を追求すべきだと主張を続けたが、キリが無いので三人とも同罪ということにして力づくで終わらせた。

自分の超能力がレベル5であることが役立つたかどうかは断言できないだろうが、とりあえず恩恵にあずかったことだけは感謝しておくことにした。

三人が飛び入りした理由は……………まあ、興味本位と考えておこう。

だが、もう一つだけイラッとしたことがある。

「お前ら、俺の球、『能力実化』使って打ち返したろ？」

「!」

三人の肩が同時に小さくびくついたのを、俺は見逃さなかった。

「凶星か」

「な、何言つてんねん、そんなことあるわけ、ないやんか」

「そ、そ、そうだよ、そんな卑怯な手を使ったりするわけ……」

明らかに動揺しているのが見え見えだ。

「ごめんなさいっ!!」

たった一人、なのはだけがあっさり容疑を認めて頭を下げる。

「ちょ、なのは、何認めてるん!? そんなこと謝らんでも……」

「な、なのはは悪くないよ……悪いのは、わ、私だよ」

フェイトまでもがなのはをフォローしたいと見えて罪を認めてしまふ。

「ええ、フェイトまで認めるんか!？」

「う、嘘はよくないよ、はやて……わ、私はなのはが謝ったから謝

っただけだよ」

「ううう、二人してウチを退け者にして……もうええわ、二人のアホ〜!」

泣きながら駆けだしていくはやて。

「あ、ま、待ってよ〜、はやてちゃん!」

それを慌てて追いかけるのはとフェイト。

あっという間に、彼女たちの姿はグラウンドの玄関の中に消えて見えなくなった。

「結局、あいつらは何がしたかったんだ……」

後味の悪い疑問を残して、勝手に事態は収束してしまった。

他の野球部員と顔を見合わせてみるが、どの部員も呆気にとられて言葉は出てきそうになかった。

.....

照りつける太陽にこれ以上耐えきれず、俺は早々にグラウンドを後にした。

結局、右脳をフル回転して考えても、最後まで彼女たちの心情を計り取れることは出来なかった。

よく女はミステリーとか言うが、確かにそうだと納得させられる。

うざったくなるぐらいの晴天はまだまだ収まりそうにない。あと三時間ぐらいは。

自分の日光耐性の無さに呆れたり、そんな余計なことを考えながら、玄関をはいって廊下の曲り角に差し掛かった時だった。

「……………や…！」

「……………んの……………もら……………け…！」

「……………めて……………こんな……………なに……………！」

何やら向いっつから叫び声が聞こえてくる。

言い争いか、喧嘩か。

しかし、叫び声のいくつかが聞き覚えのある声なのに気がついた。

明らかに関西弁も混ざっている。

あの三人か、と思い、角を曲がろうと駆けだそうとした刹那。

「うわ!?!」

閃光。

そしてドオンという爆発音にも似た衝突音。

「くそ、何だっつてんだよ!!」

苛立ちを募らせながら角を曲がると、目を疑う光景が目の前にあった。

先ほどの三人が、『能力実化』を行使して、狭い廊下を跳ねまわっている。

内輪モメ……というわけでは無いらしく、三人の視線は揃って同じ方向を向いていた。

その視線の先には、二人の少女。

背丈が倍近くも違う二人の少女は、その見た目の違いに似合わず、一糸乱れぬコンビネーションで、三人と互角に戦っている。

いや、むしろ互角以上か。

二人とも両手に二丁拳銃を持ち合わせている。

背の高い、紫色の髪にカチューシャを着けた少女が撃てば、それをかわした三人の隙を狙ってもう一人、背の低い緋色のツインテールをした少女が狙いを定める。

一方のなのは、フェイト、はやての三人は、息つく暇を与えず繰り出される弾の嵐をかわすので精一杯のようで、すでに息が上がっている。

「あっ!？」

と、飛んで弾をかわしたはやてに、着地でバランスを崩したなのはがぶつかり、二人が揃って床に尻餅をついてしまった。

それを見逃すはずもなく、即座に銃口が二人に狙いを定める。

「……つと、おとなしく見物してる場合じゃないな!!」

俺は床を蹴って飛び上がり、再度天井を蹴って跳ね返り、五人の間に着地する。

「そこまでだ」

言つと同時に目の前の二人に視線を向ける。

「何よ、あなた」

背の高い方の少女が疑惑の目を俺に投げかける。

「誰でもいい、ただこの争いを止めに来ただけだ」

「何だろうと誰だろうと……邪魔よ!!」

聞く耳持たずと言わせんばかりに、背の低い方の少女は俺に向け

て前触れなしに発砲する。

「!」

だが、次の瞬間、驚いたのは彼女の方だった。

発砲したのは俺から十数センチの至近距離、常識的に考えれば秒速何メートルの銃弾をこの距離で避けることは不可能だ。

だが、彼女の目の前で、現実にもその不可能が可能にされてしまったのだから驚くのは当たり前だ。

発射された銃弾は、俺に向かって真っすぐに飛び、そのまま命中する……善だった。

しかし、俺はその弾をあっさりかわしてみせる。

「ド、ドのおー!」

ドンドンドンという音とともに、連続で襲い来る鉛の塊の群れ。

しかし、そのすべてが、俺の首一つの動きで無駄弾にせしめられる。

「ちつくしょー!!」

苛立ち紛れにもう一発の銃弾が向かってくる。

だが、今度はいくらなんでもあり得ないと思いたくなる事態が起こった。

放たれた銃弾は、俺に命中する直前で俺の手に遮られる。

そして次の瞬間、その弾は遮った手の中から、キンという高い金属音とともに床に落ちた。

銃弾が、受け止められたのだ。

「……………!!」

今度という今度は完全に彼女も度肝を抜かれたようで、目と口を大開きにして立ちつくしている。

「終わりか？なら、こっちもいくぜ!!」

言うが早いか、俺は目にもとまらぬ速度で目の前の二人に飛びかかる。

「くっ!」

負けじと向こうも発砲するが、その弾はすべて俺の手に叩き落されてしまう。

「はあっ!」

掌に電撃を集中させ、勢いよく二人に向かって叩きつける。

二人はそれを間一髪でかわし、俺は勢い余って向こうの曲り角の壁に激突した。

「……………っっっ」

俺が痛みに呻いたのを見逃すはずもなく、二人の少女は拳銃を捨て、刃を振りかざして飛びかかってきた。

背の高い方は短刀、背の低い方は両手に真剣を持って。

「はあああっ!」

二人の叫び声が同時に廊下にこだまし、同時に剣と思えないほど

の重い一撃がその空気を揺るがした。

「……………！！」

後ろに居たなのは、フェイト、はやての三人は思わず目を覆う。

だが、驚いたのは俺ではなく、またしても彼女たちの方だった。

振り下ろされたそのへビーな一撃は、俺に直撃するどころか、両手で受け止められていた。

左から向かってきた短刀の一撃は、俺の左手の親指と人差し指に、右から向かってきた二振りの真剣の攻撃は、俺の右手の人差し指、中指、薬指に、それぞれ挟み込まれて受け止められていたのだ。

自慢するつもりはないが、俺にとってはこの程度の早さであれば、はつきり言って予測の範囲内だ。

ちょっと感覚と反射を研ぎ澄ませば、難なく対処できるレベルだったのは言つまでもないことだが、銃弾はさすがに速すぎたので、ちよつと『時間の進行速度を遅くして』対処した。

卑怯な手だとは言わないでもらいたい。

俺とて、さすがに時間を操るまでの超能力は使いたくなかったが、やむを得ないことだったのだから仕方がない。

「たあっ!!」

俺は二人の動きが固まったのを見計らって、挟んだ刃を横に振ってどかし、同時に左手で再び電撃を発する。

途端、二人の周辺に電撃が丸く迸ったかと思うと、次の瞬間、バアアンという音とともに空気が爆発し、廊下が凄まじく震動する。

そして、その爆発に巻き込まれた当の二人は、衝撃をまともに受けて吹き飛ばされた。

「……………!!」

その様子を間近で見せられた他の三人は、あまりのことに絶句している。なのはとフェイトは呆然とし、はやてに至ってはあまりの衝撃に涙目になってさえる。

その様子を横目で見て、多少の罪悪感を覚えつつも、今はもっと重要な問題を解決するほうが先だろう。

「……さてと、俺も多少騒ぎを大きくしたんであまり人のこと言えないが、とりあえず、こんなところで襲撃騒ぎを起こした理由を聞かせてもらおうか？」

俺は床に無様に転がっている二人に詰問した。

「……た、ただ…の、訓練……よ」

紫の髪の少女は、呻きながらなんとか言葉を絞り出した。

「訓練？」

俺は意味が分からず、当然のように聞き返した。

「私たち……秋乃原学園サバイバルゲーム部……そんな部活が訓練をやって、何か文句でも…あるの!？」

もう一人の緋色の髪の少女が、倒れてなお、噛みつくように反撃してくる。

「どづいうことだ？ アンタらは人を突然襲うのが訓練なのか？」

「襲うなんて人間き悪いわね……お互いに超能力の鍛錬になるって
言っただけいいわ」

「……………何者だ、お前ら」

完全に訳が分からなくなり、俺はそう質問した。

「そうね、紹介が遅れたわ……秋学サバゲー部、部長のゆりよ。ま、
本名は言えないからコードネームだけ教えておくけどね」

「…神崎・H・アリア、肩書きはサバゲー部副部長よ……! ……あ、
こっちは本名、コードネームは『双剣双銃』よ」

「……………」

かつてないほどのインパクトを伴って、二人の少女は台風のごと
く、俺の前に現れた。

だがこの後、なのは、フェイト、はやての三人までも巻き込んだ
面倒事が待ち受けていようとは、まだ俺たちの誰もが知る由もなか
ったわけだが。

武装少女と魔法少女の場合？

案内された先は、一瞬校長室かと見まがうほどの豪華さの部屋だった。

「こんな部屋が……学園内にあるとはな」

俺だけではなく、一同が目を揃って丸くしている。

説明なしに案内されれば、間違いなく賓客も接待できるだろう。

だが、よく見ると、デスクの向こうにスクリーンが見え隠れしていたり、書類棚や椅子の影に銃や剣がちらほら見受けられたりと、凝視すると一発でここが接待もへったくれもない部屋であることが一目瞭然である。

「ようこそ、わがサバゲー部部室へ」

ゆりが改まって挨拶をする。

どう考えても、ここが部室ですというのは無理があるし、仮に認めたとしても部室というには設備が豪華すぎるのと言つまでもない。

「……いろいろと突っ込みたいところはあるが、まあいい……とりあえず、俺たちをここに連れ込んだ理由を聞きたいもんだな」

横から「どうぞ」とコーヒーを出される。

驚いてもう一度部屋を見渡すと、デスクの横に給湯器とコーヒーマーカーが置かれていた。

俺は正直とてもじゃないが口をつける気にはなれなかったが、他の三人は、緊張が解けた反動か、いそいそと口をつけていた。

「……単刀直入に言うわ……あなたたち、私たちの訓練に協力してくれない？」

『ぶっ！！！？』

爆弾発言に、なのはとフェイト、はやての三人は揃ってコーヒーを噴き出し、噎せていた。

「突然襲っておいてずいぶんなもの頼み方だな」

後ろで二人が噓せながら「そっだそっだ」と拍をつける。

「さっきからの試合は一通り観察させてもらったわ……貴方たちなら、私たちのいい訓練相手になると思ったのよ」

こっちの文句には何一つ耳を貸さず、ゆりはのうのうと言っている。

俺の第六感が、こいつらとはもはや取引の余地はほとんどないということに全力で悟った。

「……どうやら、こっちに拒否権はないみたいだぜ」

俺は振り向いて三人に向かって告げる。

「……みたいやな」

こっちを見つめる有無を言わせないかのごときゆりの視線に、はやては覚悟を決めたように呟いた。

なのはとフェイトも顔を見合わせたか、諦めて受け入れることにしたようで、小さく頷いた。

「話が早くて助かるわ」

ゆりはニヤリとした。

「ただし、こっちもタダで受けてやるわけにはいかねえよ……一つ条件をつけさせてもらおうぞ」

さすがにこれ以上やられっぱなしは勘弁してほしかったので、俺は反撃を試みる。

「あら、何かしら？」

「条件は一つ、俺たちがお前たちを全員ノシたら、お前んとこのバンドの存在を全学園内に公開することだ」

「!?!」

にわかには部屋の中の空気が張り詰めたもの変わる。

そう、知っているのはごく一部の生徒だけなのだが、この学園には、「放課後ティータイム」と対をなす、もう一つのガールズバンドが存在する。

名を「ガールズデッドモンスター」という。

しかし、有名ではないことから分かる通り、このバンドは存在が公にされていない。

理由は、このバンドが独立した部活だというわけではなく、形式上このサバイバルゲーム部内の組織ということにある。

部活動の規則上、同じ名前の部活動が複数存在できないのはもちろんだが、違う部活から他の部活と重複する活動を行うこともあってはならないという規則もあるのだ。

少々きついルールにも思えるこの学園の規則だが、これは「超能力の個性」を重んじるこの学園の理念に則ったものだという話だ。

それはともかく、この部内に存在するバンドの存在を公に晒すということは、それは即ちこのサバイバルゲーム部の「違法性」を学園全体に知らしめるということに他ならない。

実質宣戦布告に等しかった。

いや、決めたのは俺だが。

「……分かったわ、そっちの条件を呑んであげる。私たちが叩きめされれば、ガルデモの存在を全校生徒に公開してあげる」

「ちょ、ちょっと……!!」

アリアがゆりを止めようとしたが、ゆりは引き下がるつもりもな
いらしく、撤回はしなかった。

「その代わり、手加減はしないわよ、訓練といえど、本気で行かせ
てもらおう……いいわね？」

「……上等」

「そうと決まれば……岩沢さん、ひさ子、入江さん、関根さん、椎
名、遊佐、アリア、……手加減なしで行くわよ!!」

『おおおっ!!』

ゆりの檄に、部員全員が叫んだ。

それを横目で見ながら、俺は完全に置いていかれている三人に声
をかけた。

「悪いな、勝手に話を進めちゃって」

「あ、あんな条件出してええの？ 何されるか分かったもんやない

で!？」

はやてがおろおろしながら聞いてくる。

「構わねえよ、あれぐらいきつめの条件出した方が、あいつらも本気で来るだろうからな」

「ほ、本気って……」

フェイトは少しばかり怖気づいてしまっている。

「本気を出させてどうするつもり……なの？」

なのはが恐る恐る聞いてきた。

「問題はない、あいつらが本気で来るなら、こっちはそれ以上の本気で叩きのめせばいいだけだ、お前らだって、あいつらに返ししたくはないのか？」

わざと意地悪っぽく聞いてみる。

「う、ウチはやりたい!」

はやてが心なしに乗り気な目で答えた。

「ウチはこのまま黙ってられへんで……あいつらに『能力実化』見

せつけてやらんと気がすまんわ」

「二人はどうなんだ？ はやては乗り気みたいだが？」

「……わ、私も……」

「……………うん」

フェイトもなのはも小さくぼそぼそと答える。

「決まりだな」

「そっちもやる気になったのかしら？」

ゆりは準備完了と言いたげな目でこちらに聞いてくる。

「ああ、4対8……………いや、一人当たり1対2か……………こちらら全員言
いたいことは山ほどあんだ……………俺も最近ちょいと鈍ってたんでな…
…久しぶりに本気を出させてもらっぜ」

俺はそう言ってニヤリと笑った。

……………

.....

訓練の場所としてゆりが選んだのは、またしても秘密基地のような場所だった。

その後、ゆりが案内すると言ってデスクをどかすと、足元には堅穴が隠されていた。

それは地下深くまで続いており、降りた先には、学園の地下とは思えないほど綺麗に整備された地下室があった。

「.....要するにこれも、学園の所有物か」

俺は入口の近くにあった銘板を見つけて呟いた。

「そうよ.....ここはもともと「超能力を実戦的に使う訓練」のために作られた部屋.....だけど、カリキュラムにその項目が組み込まれなくなっただけから、ここが使われることはなくなって.....今は私たちが訓練の場としてこっそり使わせてもらってるわ、まあ入口はあそこしかないから、あそこを知らなければ入ってこれないんだけどね」

ゆりは入口を見上げて言った。

部屋を見渡すと、高さは体育館の天井ほどもあり、広さは軽く体育館の倍はある。

ところどころには、訓練に使うと思しき障害物がちりばめられ、壁にはあちこちに弾の跡と思われる穴があった。

こっそりとはいえ、随分と好き放題に使ったものだ。

そのうちここが崩壊してしまうのではないかと要らぬ心配を抱いてしまう。

「さて、最初は誰が行くのかしら？」

ゆりは余裕たっぷりという感じで聞いてくる。

「ウチが行く」

はやてがずいと前へ進み出る。

どっちらめっほど鬱憤を晴らしたいらしい。

「好きにする………負けるなよ」

「誰に向かって言いつんの?」

はやてはニヤッと笑うと、向こうを真っ直ぐ見詰めて、出てくるメンバーをつかがう。

「岩沢さん、ひさ子、貴方たちが行きなさい」

ゆりに言われ出てきたのは、短髪のボーイッシュな少女と、ポニーテールの吊り目をした少女の二人だった。

「いつでもいいぜ……きなよ」

岩沢と呼ばれた方の少女は、早く来いとも言いたげに挑発的なセリフを投げつける。

「なら……行かしてもらおうわ!」

はやてが、叫ぶと同時に右手を前に突き出す。

その手には、金色に光りを放つ十字型のアクセサリーが下げられていた。

刹那、それが眩しい光を放ったかと思うと、瞬く間にその十字架柄が伸び、杖になる。

「さあて……ほんなら行こか、祝福の風」
ラインフォース

『オツケイ』

杖が鈍い光とともにそれに答える。

そして、はやてはそれを合図とするかのように、杖を正面に向けて構える。

それに気がつき、岩沢とひさ子もホルスターの銃に手をかける。

しばしの緊張と沈黙。

そして。

「やあああーっ！ー！ー！」

「はあああっ！ー！ー！」

三人は凄まじい勢いで激突した。

武装少女と魔法少女の場合？

ギイイインという甲高い金属音が立て続けに響く。

放たれた銃弾を。はやてが杖で弾き返す音だ。

「すげえな……全部はね返してやがる」

「あれくらい、はやてちゃんなら簡単なことだよ」

なのはとフェイトは余裕の笑みを見せる。

1対2だというのに、状況は互角かそれ以上にはやてに傾いていた。

「ブリューナク散りゆく閃光!!」

はやてが叫ぶと同時に杖の先の十字が輝き、相手の二人めがけて雨あられとエネルギーの槍が降り注ぐ。

なめられたとばかりにひさ子が発砲するが、弾き返される。

「どしたんや？ 1対2やいうのに私に指一本、銃弾一発当てることもできるの？」

はやては余裕の表情で挑発的なセリフをぶつける。

「そんなことっ！！」

向こうの障害物から一瞬岩沢が顔を出したかと思うと、次の瞬間何かをはやてに向かって投げつけてきた。

それだけでは到底はやてがいる位置までは届くものではなかったが、後ろからひさ子が不意に投げられた「それ」に銃弾で追撃をかけ、弾かれて飛距離が伸びる。

「！！」

はやてが、それが手榴弾であることに気づき、慌ててエネルギーの壁を作るが、それが終わるか終わらないかのうちに、それは閃光と大音響を伴って爆発した。

爆風が訓練場全体を薙ぐ。

「……………!!」

そこまでやるか、と俺は齒ぎしりする。

いくら実戦訓練とはいえ、仮にも室内で手榴弾を爆発させるなど、危険もはなはだしい。

下手すれば天井が落ちてくる可能性だってある。

しかし、そんなことにもびくともしないこの部屋は、さすが超能力のために作られた部屋というべきか。

舞い上がった埃と響く轟音が収まり、

「……………やつてくれるやんか」

ギリギリ耐えきつたと見えるはやてが、よろよろになりかけながらも立ち上がる。

「そつち」
「そ」

岩沢とひさは、まだやるかとも言いたげに銃を向ける。

だが、そこから銃弾が放たれる前に、はやての方が動いていた。

杖を振り上げ、左手を前にかざすと同時に、

「リングバインド輪廻の鎖!!」

すると、はやてがかざした左手からエネルギーの光条が勢い良く伸びたかと思うと相手の手から足から隅々に絡みつき、身動きを封じる。

身動きを封じるにしては縛り方が大げさすぎておかしいと一瞬思ったりしたが、はやてのあの負けず嫌いな性格を考えればまあ納得もいく。

ミノムシのように地面に無様に転がされた二人めがけて、はやてが追撃をかける。

「ラゲナロク終焉の笛!!」

杖を振り下ろすと同時に、その先端にエネルギーが小さく収束したかと思うと、閃光とともに爆発的な衝撃が二人を直撃した。

「きゃ……………！！」

叫び声はそのまま轟音にかき消される。

衝撃波と閃光が訓練場を包み込む。

凄まじい土ぼこりと風圧が訓練場全体をまんべんなく薙ぎ払い、全員が思わず目を覆った。

かすんだ視界が晴れた時、そこに広がっていた光景は、肩で息をしながらぎりぎり立っているはやてと、「レベル4」のエネルギーをまともに食らい、限界を超えて倒れた岩沢とひさ子だった。

「勝負あり……………だな」

俺は小さく呟いた。

気付かれないようにゆりの方を見ると、未だに余裕の表情を崩し

ていない。

「……………」

どうにもその表情の裏が気になる俺だったが、考えたところで答えは終わるまで分からない。

「ちょっとやりすぎじゃないのか、あれ」

俺の正直な感想に、なのはは

「はやてちゃんなら大丈夫、全力で放ったら危ないことぐらいわかるし、コントロールも得意だから。昔SSランクだったし、大丈夫だよ」

「なんだそりゃ」

「あ……と、このランク付け、君は知らないんだっけ？ 私たちが昔いたところでは、超能力レベルをランクいくつって呼び方じゃなくて、EからSSSまでの14段階評価だったんだ……「ベルカ式」って言って、今この評価より細かいんだけど、逆に複雑だから分かりにくいんだけどね……」

俺の率直な疑問に、フェイトが代わりに説明した。

知らないところにはまだまだ知らないことがあるものだ。

詳しいことはあとでまたなのはに聞いておこうと思った。

倒れた岩沢とひさ子が運び出されると、かわって入江と関根と呼ばれた少女二人が立ち上がり、前に進み出る。

はやては続けて立ち向かおうと杖を構えたが、フェイトがそれを制した。

「ありがとう、はやて……あとは私がやるから……」

にっこりと笑みを見せると、はやては最初納得がいかない顔をしてはいたが、

「わかった……フェイトちゃん、おおきに」

と引いて引き下がった。

「行くよ、バルディッシュ……君もちよつと退屈してたころじゃないかい？ 今日には思い切りやっていいよ」

『OK, Set me stumbling』

フェイトの手に握られた金色のアクセサリーが機械的な声で返答し、同時に輝く。

瞬く間に先端が黒く染まり、柄が伸びると同時に先端が横に曲がって斧のような形となる。

そして柄と刃の接続部分に金色のコアがはまり込み、それは完成した。

「用意はいい？ 本気で行くよ」

フェイトがそう問いかけると

「……でもどっぞっ」

関根の返答が返ってくる。

「なら……手加減はしないよ！」

フェイトの叫び声と同時に、斧杖の先端が半角スライドし、コアが輝くとともにその先端に電撃と思しき刃が形成される。

その姿は瞬く間に斧から鎌へと変貌した。

「アークセイバー
光雷の刃……」

フェイトは静かにそう唱えると、杖を振りかざし、一目散に二人の相手に向けて突撃していった。

武装少女と魔法少女の場合？

一直線に狙い変わらず雷光の刃が二人めがけて迫る。

「関根!!」

「おっけー!!」

合図すると同時に、関根は何かを取り出し、手にはめた。あれは……、

「プロテクター……!!?」

俺がその意味を考える間もなく、理由はすぐに分かった。

「なっ……!!?」

俺たちの目が揃って丸くなる。

向こうのフェイトも同様だった。

関根は、不意にプロテクターをはめた右手を前に出したかと思うと、フェイトの鬼気迫る電撃の刃を受け止めてしまったのだ。

関根がレベルいくつかは知らないが、あの刃は「能力実化」マインドブリンクで出したものであり、そこから放たれるエネルギーに触れることは、すなわち他人の超能力の源となるエネルギーに触れることと同じだ。

超能力者の体内には、超能力を生みだす源となるエネルギーが秘められている。

そのエネルギーが、脳か、心臓か、筋肉か、身体のどこに秘められているかによって、その人間がいかなる超能力を持つかが決まる。

しかし「能力実化」の場合、実体化したモノそのものが能力エネルギーであり、それに直に触れることは、能力者自身にも相当な負荷をかけることになる。

「なんだ……あのプロテクターは？」

しかし、そんな危険行為をもともせずやってのけることを可能にしたあのプロテクターは一体何なのだろうか。

「恐らくあれは、通常の格闘戦用のプロテクターを非導体素材で加工し、能力者のエネルギーを強力な対電撃系エネルギー防護に変換する機能を付加させたもんや……」

はやては考え込みながら呟く。

「あんなにレベルが高いもんなのか……？」

「いや、あのプロテクターそのものはいたって普通や……けど、あれに付加されてる防護能力と変換機能効率……もしくは彼女の能力か……そのどっちかは、フェイトちゃんの攻撃を受け止めたところを見ると、かなりレベルが高いもんやと考えなあかん」

「……ということは、あのプロテクターは……」

「せや……あらかじめフェイトちゃんか、もしくはそれ以上のレベルの超能力者を想定して対策が施されると考えて間違いあらへんな」

「……………」

俺の脳裏に御坂美琴の電撃が思い浮かぶ。

彼女の電撃を想定して対策をしたとすれば、無論美琴よりレベルが下のフェイトの攻撃は難なく受け止めることができるだろう。

確証はないが、可能性としてはあり得る話だ。

考え込む間もなく、爆音とともにフェイトがバックステップで相手から距離をとる。

電撃が防がれてしまったのならと、刃を消して斧杖そのもので殴りかかってみるが、今度は入江に受け止められてしまう。

はやてが戦った二人よりは、まだ手馴れ的那样だ。

「苦戦しとるみたいやなあ、フェイトちゃん」

「そつだね……」

はやてはなのはに話しかけるが、その顔に心配の色は一片もない。

「余裕な顔だな」

「当然だよ？ フェイトちゃん見て……まだ全然本気出してないでしょ？」

言われてフェイトの方を見る。

先ほどから何度も斬りかかっては弾き返され、バックステップでかわしてから切りかかるの繰り返しをしているが、息が上がっている様子も、策に詰まった様子もない。

その顔からは、まだ余裕が消えていなかった。

だが、その余裕を確認する前に、相手の方が動いていた。

「たああああっ！」

関根のまるで気合の入り切っていない掛け声とともに、いつの間にか左手にはめ込まれていたもう一つのプロテクターがフェイトにストレートを見舞う。

見た目はどう考えてもダメージを与えられるとは思えないパンチだったが、受け止めた瞬間、フェイトはガクツとふらついて膝をつき、バランスを崩す。

「どっしたんや！？ フェイトちゃん！！」

気付いたはやてが叫ぶ。

「……重い……」

フェイトはやっとのことでそれだけを口にする。

「重い……やて……！？ なのはちゃん、もしかして……」

はやてが視線でなのはに確認をとると、なのはも、

「うん……どっちら、間違いない……みただね」

重々しい口調でそれに返答した。

「なんだ？ 一体何が……」

「うちの勘が正しければ……あれは『重量操作』……モノの重さを部分的な重力操作によって自由に操れる能力や」

「今の攻撃は、パンチを繰り出す速度を利用して、瞬間的に自分の手の重さを増大させたんだね」

「冷静だな、お前ら」

俺は半ば呆れの視線を向けたが、

「言ったでしょ、フェイトちゃんにとっては、あれくらいは想定範囲内だって」

なのはがそういうと同時に、横で黄色の閃光が爆発した。

「ほら、ね」

なのははにっこりと笑った。

「重さを自由にコントロールできる超能力……君もなかなか厄介な

超能力を持つてるね」

「!?!」

自らの超能力を瞬時に見抜かれたことに驚いたのか、入江が一瞬たじろいだ。

「なら、君の方から終わらせるよ」

フェイトはそう呟くと、自らの斧杖に向かって唱える。

「バルディッシュ閃光の戦斧、ザンバーフォーム雷剣形態」

『Z a m b e r F o r m T r a n c e 』

戦斧が確認するかのようになりピートし、続いてまばゆい光に包まれたかと思うと、斧から雷光の刃を持つ大剣へと姿を変えた。

見るからに重そうだが、フェイトはそれを難なく振り上げて構える。考えれば刃は電撃なのだから重さはなくて当たり前か。

「はああああっ！！！！」

フェイトはその剣を振りかざし、一直線に入江へ向かって切りかかる。

入江はその一撃を横にステップしてかわすが、着地際の際をフェイトは見逃さなかった。

振り下ろした剣を地面から強引に抜くのももどかしく、そのまま引きずるようにして横に大きく振る。

そしてそれは、その隙を狙い違わず捕え、入江に直撃し、壁に叩きつける。

それっきり入江はぐったりとしてしまう。ノックアウトだ。

「！！！！」

それを見て関根が声を上げかけるが、その前にフェイトの方が動き出していた。

「閃光の戦斧」^{バルディッシュ}が再び輝き、剣のシルエットが分かれたかと思うと、瞬く間にそれが二つの剣となる。

分かれる前より些か小振りだが、攻撃力の低下を手数で補っているのだろう。

「君の右手に触れば、雷撃は防がれてしまう………だったら、雷撃の数を増やせばいい!!」

フェイトは言うのが早いか一直線に関根に迫り、右手を振り下ろす。

関根はかろうじてそれを両手で受け止めるが、いかんせん片方だけ止めても意味はない。

「これで!!」

同時に左手で振り上げたもう一方の剣が、完全に無防備な関根の脇に直撃し、次の瞬間、轟音とともに爆発が起きた。

爆風と砂煙がおさまった時、そこには傷だらけで倒れた関根と、傷一つない姿で立つフェイトの姿があった。

フェイトは悲しさと寂しさの混ざったような顔で関根を見下ろし、それからこちらを見て、静かにほほ笑んだのだった。

だが、まだ終わってはいない。

勝負はあと二回戦残っているのだ。

武装少女と魔法少女の場合？

次はといえば、当然なのは番だった。というか、本人が真っ先に率先して出たのでそうなたただけかもしれないが。

まあ何も問題はないからいいのだが。

「行こうか、レイジングハート」

呟いて、なのはは首から下げていたペンダントに語りかけた。

先端が今まで服の中にしまわれていたので見えていなかったのだが、そこには紅く輝く珠がついていた。

『Yes, my master』

同時にそれが、「バルディッシュ」とは相反するかのとき女性的な声で答えたかと思うと、今までと同じように輝きを放ち、続いて周りに、囲むように金色の三日月状のパーツが浮かび上がり、珠がその中央にはめ込まれると同時に柄が伸び、瞬く間にそれは杖となった。

なのははそれを構え、相手の出方をうかがう。

だが、いつまで経っても相手が出てこない。

「どうしたの？ 今更怖気づいたなんて、言わないよね？」

なのはは半信半疑な顔をしながらも、向こうで高みの見物を未だに堂々と続けているゆりとアリアに問いかけた。

答えは無い。

「!？」

そのとき一瞬背筋がぞくっとした。

薄暗いこの部屋のどこかから、尋常ならざる敵意が漂ってくる。

刹那、なのはの数メートル後ろで、何かがきらりと光ったのが見えた。

そこには通常訓練用の岩状の障害物があり、なのはの位置からでは死角の上、照明の少ないこの部屋では影になっている。

なのは気付いていない。

そして、次の瞬間、再び「何か」が光ったかと思うと、影から「誰か」が飛び出し、なのはに迫る。

「後ろだっ!!」

「っ!!!!」

反射的に俺が叫び、その声でなのはが振り向いたと同時に、鋭い金属音が響き、火花が散った。

そこには、襟巻きで顔の半分近くを覆い隠した、長髪の女子生徒が立っていた。

その手には、光沢を放つ一振りの日本刀が握られている。

今まで分からなかったのは、さっき部室に行った時に、こいつが静かすぎてつい見落としてしまっていたから、ということになる。

陰で気配を絶って後ろから襲いかかるとは、まるでくノ一だ。

「はっ！！」

キレのある掛け声とともに、その女子生徒は怒涛のごとく連続で凄まじい回数 of 攻撃を繰り出して来る。

今までの連中とは、レベルが明らかに違う。

しかも、日本刀と杖とでは、どう考えてもなのはの方が取り回しの面で苦戦を強いられてしまうのは明らかだった。

その予想通り、その女子生徒　名札から「椎名」という名前のような　は、耐久力と攻撃の重さで杖に劣る日本刀を、圧倒的なまでの手数 of 多さで完璧かそれ以上にカバーしている。

一方のなのはは、杖の長さに助けられ、押し寄せる連続攻撃の波を防ぐので精一杯で、隙を見て反撃の機会を伺ってはいるようだったが、椎名のあの攻撃速度では、取り回しで日本刀に大きく劣る杖で、攻撃の合間に反撃することはまず不可能だ。

「浅はかなり」

椎名は短くそれだけ言うと、ひときわ速く鋭い一撃を振り下ろす。

なのはそれをギリギリで受け止めたが、柄にビリビリと震動が走る。

「遊佐」

椎名が短く名前を呼ぶと同時に、向こう側の障害物の陰から茶髪の少女が飛び出したかと思うと、何かをなのはに向かって投げつける。

次の瞬間、それが破裂音とともに目が眩むほどの凄まじい閃光を放ち、視界を奪われてしまう。

目をつぶった向こうで、二回目の破裂音が鳴り、続いて「ああっ！！」というなのはの叫び声が聞こえたかと思うと、轟音とともに空気が振動する。

奪われた視界がようやく戻り、ズキズキ痛む瞼を開けると、そこには勝ち誇った顔で佇む椎名・遊佐と、杖に頼ってやっとのことで立っている状態のなのはがいた。

先ほどまでの二戦とは展開が逆だ。

どうやら閃光弾で全員の視界を奪った後に、スタングレネードを

投げて動きを封じ、そこに先ほどと同じく手榴弾を投げこんだというところだろう。

スタングレネードと思しき空缶が、椎名の足元に落ちているのが見えた。

視界を奪われた状態では手榴弾が直撃してもおかしくは無い状態だっただろうが、なのはは勘か、もしくは『不屈の心』^{レイジングハート}のサポートでギリギリかわしたということが。

『Acceler shooter』

突如、何の前触れもなく『レイジングハート』が唱和したかと思うと、なのはの周りに五、六個ほどの光る球体が現れる。

「……シューーート!!」

それに呼応するかのようになのはが叫ぶと同時、それらの球体は一目散に相手の二人めがけて一斉に突撃していく。

椎名と遊佐は難なくそれを避けたが、球体は避けられたと同時に直角の光跡を描いて鋭く曲がり、見失うことなく二人を追い続ける。

「くっ!!」

遊佐はやむを得ず腿のホルスターから拳銃を取り出して球体に向け振り向きざま発砲する。

追いかけてきた球体のうち二、三個が弾に当たりはじけ飛んだが、撃ち落とすきれなかった一つがそれをくぐり抜けて拳銃に命中し、そのまま拳銃とともに爆発した。

武器を失ったことで、状況はほんのわずかなのはに好転したと言えるが、たえそうであっても、なのはの状態はつきり言って不利なままだ。

こちらはダメージを負った上に、曲がりなりにも一対二で戦っているのだ。状況はいいとは言えない。

「終わりだっ！！」

椎名は鋭い声とともに、常人離れた驚異的なスピードでなのはに切りかかる。

再び訓練場に甲高い金属音が響き渡った。

「やるな」

顔が隠れていて表情まではよく分からなかったが、椎名はそう言った。

「……私はまだ、やっては無いんだけど」

「……なに？」

その言葉の意味を椎名が知るか知らないかのうちに、杖の先が一瞬輝き、爆発を起こす。

椎名は後ろに飛び下がったが、ダメージは負ったらしく、着地際にガクツとバランスを崩す。

「貴様……!!」

「言ったでしょ……私はまだ『やってない』って……」

「何をっ!!」

「バカなことをっ!!」

二方向から遊佐と椎名が同時になのはに切りかかる。

「!?!」

なのはは瞬時にその方向に光の壁を形成し、防御しようとするが、わずかに二人の方が早かった。

刃とエネルギーが接触し、スパークが飛び、再び爆発が起こった。

「……………!?!」

室内を暴虐的な衝撃が暴れまわる。

先ほどのフェイト、はやてとは比べ物にならない激しさだ。

やはりこのあたりは能力者のレベルが少なからず関係してくるということがある。

台風のような嵐がおさまった時、その場にいた全員が目を見つめた。

そこに居たのは、同じく驚愕のあまり目を見開いたままの椎名と

遊佐、そして、二方向からの刃をそれぞれ片手で受け止め、その手を血まみれにしているのはだった。

「な……のは……」

フェイトとはやては、驚きのあまり腰が抜けて立てなくなり、情けない声を出すことしかできなくなっていた。

「これで分かった……？ 私はまだ『やっていなかった』って……」

言い終わるか終わらないかのうちに、なのはの手元にリング状に光が走ったかと思うと、次の瞬間、二人は連続で起こった爆発に巻き込まれ、またしても姿が見えなくなってしまう。

と思う間もなく、煙をすり抜け、ドサツと床に倒れた二人の姿が見えた。

「……………」

心なしか、倒れた二人を見るなのはの眼が悲しげだったと思ったのは俺だけだろうか。

「それで勝ったつもりかしら」

残り二人だけになったというのにまったく動じていない顔で、ようやくゆりとアリアが重い腰を上げたようだった。

「高岡……くん……」

血まみれの手をかばいながら、なのははすれ違いざま、小さな声で呟いた。

「……………負けちゃダメ……………だよ……………」

「……………!!」

その一言で、俺の中の何かが、鼓動したのが分かった。

そっだな。

こいつらには分からせてやらなきゃならない。

超能力者同士が戦うことが、いかにバカバカしいかってことを。

だが、その時、俺たちの間に割り込んできた影が、それを遮った。

「双方とも、今すぐこの喧嘩をやめて……やめないと、カづくで止めるわ」

静かながら、しかし凜としたその声は、いつの間にかここに居た、秋学風紀委員長・立華奏のものだった。

そして、俺の眼先に突きつけられた、手先と一体化した刃が突きつけられていた。

訓練場全体が、にわかには張りつめた緊張に支配された。

武装少女と魔法少女の場合？

訓練場の空気が張り詰め、一瞬で凍りつく。

ある意味、苦勞して倒したステージのボスが、最終ステージでパワーアップして再登場したときの緊張感と同じだった。

「……何の用だ」

内心びくつきながらも、俺は問いかける。

「このバカな喧嘩騒ぎを止めに来た、と言ったわ」

奏は答えるのも面倒だという顔一つせず、淡々と無表情で返答する。

「無理だ、と言ったら？」

「ちょっと怪我してもらってでも、止めるわ」

言い終わるか終わらないかのうちに、彼女の右手が空を薙ぐ。

俺は慌ててかわすが、奏はそれで終わることなく、女子離れた驚異的な速度で連続攻撃を繰り返してくる。

「ええい!!」

俺は避けるのが面倒になり、その一撃を白刃取りする。

「!!」

奏はほんの少し驚いた顔をしたが、想定外だというほどのことはなかったようで、

「さすが、学園の『デュアルサイキッカー複数能力者』ね」

「その名前で呼ぶなって……言ってるだろ!!」

カチンときた。

俺は白刃取りした刃を強引に押しつけ、そのまま細い二の腕を掴むと、背負い投げる。

奏はそのまま悲鳴の一つもあげずに地面にたたきつけられた。

「……………」

呻くことすらしない奏。まるで感覚が無いのかと一瞬疑うほどだ。

「!?!」

かと思ったその時、素早く起き上がると飛びのいて距離をとった。

「なかなかタフじゃないか」

俺はその切り変わりの早さに敬意を添える意味でそう言うておく。

「……バカにしないで」

相変わらずの無表情で奏は呟くようにそう言った。

「そつちこそな!?!」

次の瞬間に起きたことは、超能力者でない人間にとってはもはや理解すらできないことだっただろう。

そう考えても仕方のないことだった。

一瞬で俺と奏の姿は、その場に居た他の全員の視界から消え失せてしまう。

「へっ!?!」

なのは、フェイト、はやてはそろって目を点にした。

そして、彼女たちの目の前では、まるで夜空に打ち上がる花火のように、虚空で金属音と火花だけが見えていた。

あつちで一瞬刃が輝いたかと思うと、こつちで火花が散り、そつちで土煙が上がる。

「な……何が起こってるんや……?」

はやては状況を全く理解できずに、誰にともなく聞いた。

「……多分、二人は、目に見えない速度で戦ってるんだと思う……」

フェイトが唇を噛みながら静かに答えた。

「な………なんやて!?! ほんならあれは………」

「そう………私たちが戦えるレベルを軽く超えてる」

はやてはそれっきり言葉を失ってしまう。

目の前で、自分の想像を超えた戦いが繰り広げられていることは、にわかに信じがたかった。

「今まで、この超能力に睨みを利かせて風紀を護ってきたわけかい、生徒会長さんよ!!」

姿は見えず、声だけが薄暗い空間に響く。

「こんなことしなくても、風紀は守れるわ……だけど、いくらそうしても、貴方たちみたいな人が騒ぎを起こすから、ここに来ているだけよ」

「ふん、それで分かったよ……お前が本気を出せば、当然こうなるから皆は規律を守る……だけど、サブゲー部だけは、特にあの二人は、超速スピードだけはあるからお前と互角だった、それで今まで潰すのに手こずってきた……そういうことだろ、そこで後ろから襲おうとしているお二人さん？」

「!?!」

後ろの障害物の陰に居たゆりとアリアがびくっと飛び上がる。

「気がついてないとも思ったか!? どさくさにまぎれて俺を三対一でのして、後からゆつくり会長の相手をしようとかいう見え透いた考えは、持たない方が身のためだぞ」

我ながら悪役めいたセリフに馬鹿らしさを覚えたが、二人を踏みとどまらせるには十分だったようで、そのまま二人は悔しそうな顔をしてその場にへたり込んでしまった。

「そこではばらく見てろ、お前たちがどんな人間に喧嘩を売ってるのか、たっぷり分からせてやるよ」

そして俺は再び奏と激突する。

姿が見えず、火花だけが花火のように不規則に飛ぶ様は、もはや科学の力だのなんだので説明できることでは到底ないことだった。

そして、再び他の人間の眼に姿が映される。

刃を突き出す奏と、その刃を素手で受け止める俺。

「やるじゃないか、さすがは『物質操作（トランス）』の使い手だな」

「……………」

「……………答えはなしか……………、なら、これでどうだ？」

刹那、掴んだ刃がドロリと溶けて、そのまま蒸発する。

「!!」

さすがに予想外と見えて、生徒会長はぱつと後ろに飛びのく。

「なぜ……私の『物質操作』を……」

「簡単なことだ、お前が『物質操作』するなら、それをこつちで上書きすればいいだけだからな」

「まさか……貴方も『物質操作』を……!？」

「今頃気がついたか？」

「……………!!」

超能力では埒が明かないと思ったらしく、奏は素手で肉弾戦を挑んできた。

連続で繰り出されるパンチや手刀を受け止めながら、俺は反撃の一手を考える。

「っ!」

左からの横キックをのけぞって避ける。

よくもまあ、そんなヒラヒラした格好でそこまで格闘戦ができるもんだと感心する。

で、肝心の反撃の策はと言えば、さっぱり思いつかない。

つくづく手加減を知らない自分自身の超能力に振り回されるのは気が滅入るところだが、今はそんなことを逡巡しては日が暮れる。

「悪い、終わりにさせてもらっ

「……」

俺は素早く後ろに回り込み、首の後ろに手刀を叩きこむ。

「……………」

生徒会長は息がつまるような声を上げたきり、床に崩れ落ちて動

かなくなった。

「すまん、手加減できてなかったら悪いな」

小声で薄っぺらな謝罪を呟いて、俺は奏を持ち上げ、訓練所の隅へ運んでやる。

その身体は、あまりに軽かった。

「さて、待たせたな、お二人さん？　今を見てもまだやるうという意気込みは尊敬するぜ」

戻ってくるなり銃と剣を構えるゆりとアリアを一瞥して言った。

「もう一度聞くが、やるんだな？」

「当然よ」即答された。

「貴方が強いならなおさらのこと、勝つ価値があるわ」

「アンタを打倒せば、私たちが学園最強ってことになるもの」

諦めの悪さには正直まいるといつか呆れるといつか。

「手加減はしないぞ？」

「したら許さないわよ」

ゆりの返答に、俺は面倒に思いながらも、構える。

それに合わせ、二人も構えた。

しばしの緊張が走る。

「だっ！！」

「たあっ！！」

そして、激突した。

武装少女と魔法少女の場合？

次の瞬間、全員の視界から、俺とゆり、アリアの姿はまたしても消え失せた。

さっきと同じ、金属音、火花、そして今度はそこに銃声加わる。

「今までこの超能力で天下の生徒会長さんと互角にやりあってきたわけか、お二人さんよ！」

戦っている人間以外にはどこで喋っているかまったくわからないだろうなと思いつつ、俺は同時に多方向から押し寄せる鉛の弾の嵐をかわす。

「思考を働かせる余裕があるなんて、なめられたものね！！」

ゆりは反論しながら、まったく当らない弾に歯がゆさを感じていた。

そしてそれは、一方のアリアも同じだった。

「どつした？ もう息が上がったのか？ こっちはまだかすり傷一つつけられちゃいないんだが」

あまりの馬鹿らしさに、いい加減やる気がなくなってくる。

「馬鹿にしないでよ!? まだ本気なんて出しちゃいないんだから」

アリアは拳銃で応戦するのを諦め、背中から真剣を二振り抜き放ち、飛びかかってくる。

「諦めの悪いっ!」

俺はその刀身を両手で受け止める。

「いい加減理解しろ!! お前らは俺を買い被りすぎてる!! お前らがどうしたところで、俺を倒せるもんじゃないんだ!!」

「そんなことは、やってみなきゃ分からないわ……あいにくと、私たち秋学サバゲー部は、学園一諦めの悪い人間たちの集まりなのよ!」

ゆりは短刀を腰から引き抜き、斬りかかってきた。

「ええい!」

「!?!」

「うあっ！！」

ガキインという音とともに、二人の刃が噛み合った。

二人は一瞬何が起こったのか理解ができなかった。

アリアの刀を受け止めていた俺に向かって切りかかったはずなのに、いつの間にかアリアに向かって切りかかっていたのだから当然だろう。

「ちよっと！！ 何してくれるのよ！！」

「馬鹿言わないで！ 私が斬りつける相手を間違えるわけないですよ！！！」

「冗談じゃないわ！ 今のは絶対私を狙ってたじゃない！！」

仲間割れが始まった。

「い、今のは、何が起こったん……！！？」

「さ、さあ……！！？」

フェイトとはやては顔を見合わせた。

見ていた人間にも、斬りつけられた相手がいつの間にか俺からアリアにすり替わっていたようにしか見えなかっただろう。

「……私の勘が正しければ、あれは……」なのはは一人静かに呟いた。

「喧嘩なのに……そこまでの……高岡君……!?!」

「仲間割れか？ 隙だらけだぞ」

「!?!?!」

いつの間にか、ゆりとアリアの背後に俺が立っていた……ようにほかの人間には見えただろう。

「!?!?!?!?!」

「!?!?!?!?!」

「遅いっ!?!」

爆音が響き、続いて吹き飛ばされそうなほどの衝撃。

「……く…アンタ……何をしたのよ……!?!」

よろよろと立ちあがりながら、アリアがこちらを睨みつけてくる。

「何のことはない、ただちよつと時間をいじくっただけだ」

「な……!?!」

二人はそろって呆然とした。それはフェイトとはやても同様だった。

「時間を操作した……やて……!?!」

「そ、そんなことが……!?!」

そう、結局、時間を止めて事を起こせば、多少の無茶もあっさり
と可能になったりするものだ。

ゆりが斬りかかってきた瞬間に時間を止め、刀を抜け出した後で、
ゆりの斬りかかるライン上にアリアを移動させれば、時間を止めて
いた間のことは俺にしか把握できず、周りの人間にはまるで錯覚の
ように俺が消え失せてしまったように見える。

そして騒ぎになった後で再び時間を止め、その間に二人の背後に

寄ってから時間を動かせば、いつの間にか俺が後ろにいたように感じられるわけだ。

当然、言われなければ理解も把握もしようがない超能力なのだが、どうやらなのはだけはあたりが付いていたようで、「やっぱり、そうなんだ……」と誰にも聞こえないくらいの声で呟いたのが聞こえた。

「くっ……それなら!!」

アリアはすぐさま拳銃を二つとも抜き放ち、機銃を撃っているかのごとく猛烈な鉛の嵐を俺に浴びせる。

だがまたしても、アリアが驚く番だった。

命中するはずの弾は、俺が青白い光を一瞬放ったとたん、なぜか俺の数センチ手前で直角に曲がり、そのまま天井へめり込む。

続く弾も、あり得ない角度で軌道がねじ曲がり、床へ壁へ天井へと穴をあけていく。

「……どうして!?! どうして当らないの!?!」

アリアは悔しさに歯ぎしりをする。

「何のことはない、今はただ、体の表面に高電圧で磁場を発生させて、鉛に反発するようにしたただけだ、時間を止めるより簡単なトリックだろう？」

「……馬鹿にしないで!!」

ゆりは馬鹿にされたと思ったらしく、ポケットから何かを取り出したかと思うと、俺に向かって投げつけてきた。

次の瞬間、訓練場全体を目も眩むほどの光が覆い尽くす。

「しまった、閃光弾か!!」フェイトが叫んだ。

かろうじて閃光の直視を逃れたフェイトだったが、気がついた時には既に遅く、目の眩んだ俺に向かって、ゆりとアリアがまっしぐらに飛びかかっていくところだった。

フェイトが声を上げようとしたが、間に合わない。

だが、そこでまたしても信じられないことが起こった。

俺の身を切り裂く、と思われたその刀身は、すれすれのところであっさりかわされる。

それならばと、アリアが即座に背後に回り込んでみるが、結果は同じだった。

俺は目をつぶったまま、まるで動きが見えている時と同じように攻撃をかわす。

「バカバカしい、そんな殺意むき出してかかってきてたら、エネルギーを感じ取りやすくなって、目を閉じててもバレバレになっちゃうぜ」

「!?!」

「せいぜい怒らないように自分をコントロールしとけ!?!」

言うなり俺は、背後にいたアリアの鳩尾に手の甲を返して強烈な一撃を加えた。

「……っ…あ!?!」

アリアは短く叫んだきり、そのまま地面に崩れ落ちて動かなくなった。

「……さて、これで一対一だ、フェアにいくかあ？」

横目でゆりを見やると、さすがに勝ち目がなくなったと悟ったらしく、唇を噛んでいた。

「……わかったわ、私たちの負け……」

ゆりは俯き加減にそう言った。

.....

さて、事の顛末をそれから少しだけ話しておこう。

訓練場で倒れた人間全員を、救護設備のある部室まで運び出すのには骨が折れた。

面倒だったので、最後のほうはもはや超能力『ゼロ・グラビトン無重力化』を使っていたのは秘密だ。

それからというもの、サバゲー部は、今回のように大げさな騒ぎを起こすことはほとんど無くなったものの、学内では、未だに時々、サバゲー部と思しき銃声や爆発音を聞くことがある。

いつかまた、世間知らずな人間がサバゲー部の部長になったとき、俺の時と同じような騒ぎを起こすのかどうか、俺はそれがほんの少しだけ気になった。

「高岡君……」

珍しく屋上にやってきたのはが声を掛けてきた。

「お前がここに来るなんて珍しいな……今日は豪雨にでもなるんじゃないか？」

雲ひとつない夏晴れの空を見上げながら皮肉っぽく言うと、

「ちょっと、ひどいこと言わないでよ〜」「いってっ」

デコピンされた。

「……時間を止めること、出来たんだね……」

「……ああ」

俺は苦々しげに答えた。

「どっして……あそこまで……したの？」

なのは俺のあの対応が気になって仕方がないようだ。

「どうしたもこうしたもない、いくら俺でも、あそこじゃああしな
ければ、今頃俺はコマ切れ肉だよ」

「……………本当なの？」

「ああ、俺は殺されそうにさえ思ったからな……………身を守るためにと
つさにああした……………それだけのことだ」

「……………そっか」

なのははそれで納得がいったらしく、手に持っていたフルーツジ
ユースに口をつけた。

「……………おい、ちょっと待て」突っ込まずにはいられなかった。

「ん？ なに？」

「なに？じゃねえよ、お前最初っからここでサボるつもりだったろ
！？」

「あれ、言わなかった？」

「今初めて聞いた」

「じゃあ聞いた通り、そういうことで」

「おいこら」極めてナチュラルに、しかし無理矢理に溶け込まれた。

「お、なのは、先に来てたんか、昼間っから彼とお熱いこつたなあ」

「うわ、さらにお邪魔が増えやがったよ。」

「ちょ、ちょっと、はやてちゃん!？」なのはが何故か真っ赤になつて反論している。

「ちょっとフェイトちゃんも何か言つてよ〜!!」

「わ、私は別に……う、羨ましいとか、思つてないからね!？」語尾が妙に強調されている。

「なんや、フェイトちゃんも狙つてたんか?」

「ば、馬鹿っ、はやてつてば、そんな……」「フェイトがしどろもどろになりながら反論する。

あいにくと、俺は女子同士のなれ合いに萌えるとかいう趣味は持ち合わせていない。

……まあ、この光景が眼福だということとは否定しないが。

そして今日も、屋上の平凡な日常が、変わることなくゆっくりと過ぎていった。

複数能力者に振り回される場合？

情けないことに、体調を崩してしまっただけらしい。

朝起きた時は何ともなかったのだが、屋上で何時ものように何となく寝ころんだまま過ごしていると、途中で寒気がし始めたのだ。

最初は気のせいだと思って片付けていたのだが、そのうち寒気が無視できないレベルになってきてしまったときにはすでに遅く、俺は身動きをとることができないほど、身体にだるさが襲ってきた。

どうしたものかと、痛む頭を使って思索しているうち、意識が次第にぼやけ、そして真っ暗になった。

6月11日、午前10時16分。意識喪失。俺は打ち捨てられた屍さながらに、屋上の硬い床の上に転がった。

同時刻、下のフロア、階段。

「どづしたん？二人とも、急に屋上行こうなんて言い出して……」

はやてはなのはとフェイトの二人に引っ張られ、屋上へ向かう階段

を上っていた。

「いいじゃない、たまには授業をサボるのも」なのは悪びれた様子もなく言った。

「もう、仕方ないな」フェイトさえそういつつ心なしか乗り気なように見えた。

「なんや？ また彼と話したくでもなかったんとちゃうんか？」はやてがストレートに疑問、というか直感で思いついたことをそのまま投げかける。

「にゃ！！？」

「あわっ！！？」

途端、なのはは階段を一段踏み外して転びそうになり、フェイトは手元が狂って、持っていた缶コーヒーを落としそうになる。

「ちょ、ちょっとはやて！？ そんなこと言わないでっば！」わたわたしながら反論するフェイトだったが、今のアクションがはやてに完全に見られてしまったことで、ちょっとした弱みを握られてしまったも同然だった。

それは横のなのも同じだったようで、軽く涙目になりながら恨めしそうにはやてを睨みつけていた。

「あはは、まあ、たまにはこうして出歩くもええな」

はやては軽く同意を示すことでそれを誤魔化そうとする。が、今度のはのが反撃する番だった。

「はやてちゃん、後で高岡君からもお仕置きしてもらった方がいいかなあ？」

「ええっ！？ ちょっと、それどいう意味やねん！？」間の抜けた声ではやてが驚く。

「さあ……なのはが言うんだから、きつとすごいことになるのは間違いないんじゃない？」フェイトも想像がつかないという顔をしていたが、内心ではなのはと同じことを考えていたらしく、口角が微妙にやけていた。

「あ、いたいた」

屋上で昼寝をいつものように堂々とする俺を見つけて、三人は傍に座り込んだ。

「お休み中やね……邪魔したらアカンな」

「みただね」三人は小声でひそひそとやり取りをかわす。

「さてと……ほな、さっきお二人が慌てた理由を聞かしてもらおうか？」

先ほどの仕返しとばかりに、ニヤニヤと悪戯っぽい笑みを浮かべながらはやてが二人を視線で嘗めまわした。

「だ、だって、いきなりあんなこと言われたら誰でも……!!」

「私は、世間話があったいんかて聞いただけやで〜?」「フェイトの必死の反論はあっさりとはやてにかわされてしまう。

「違うもん、はやてちゃん絶対、そういう意味で聞いたんじゃないよ!」「なのはが思わず大声を出すと、フェイトが「しー、しーっ」と慌ててなだめた。

「ほ〜う、なんでそないなこと言い切れるんや? 私は友達として話するんかって聞いただけやで?」「しれっとはやては言ってる。が、そう言いつつ、はやての笑顔にはところどころに下心が見え隠れしていたの言うまでもない。

「もう、はやてもいい加減からかうのはやめてよ……なのはってこっついう話に関しては不器用なんだからさ……」

「こっついう話で、どっついう話や?」

「それは……その……」はやてがニヤニヤしながら聞き返したが、フェイトは真つ赤になってそれきり黙りこんでしまった。誤魔化すように缶コーヒーに口をつける。

「もう、二人ともウブだねえ……」

「ぶっ!!!?!?」

「ふええっ!!!?!?」

その一言でフェイトは盛大に缶コーヒーを吹き出してしまい、それに驚いてなのはが飛び上がった。

「ちよつと、はやてちゃん!? 今何て言ったの!?!」言い訳は許さないという迫力をたぎらせてなのははやてににじり寄った。

「い、今私なんも言うてへんで!?!」はやては完全にその迫力に圧されて逃げ腰になりかけていたが、なんとか反論の言葉だけは口にしました。

「じゃあ……今、言ったのは……!?!」フェイトがそれを言うと同時に二人も我に返り、そろって屋上への出入り口の方角を見る。

そこには、一人の少女が立っていた。

髪はやや天パがかかったウェーブのある長い金髪で、子供のよう
な無邪気な顔と、そのくせ大人びた流麗なスタイルの体つきをした
女子生徒だった。

「あなたは……？」

「はじめまして、アタシは峰理子、理子とか理子りんでいっよお」

「ど、どうも……フェイト・T・ハラオウンです……」

屈託のない笑顔で爽やかにあだ名呼びを薦めてくるその峰理子な
る人物に対し、若干戸惑いを覚えながらもフェイトは何とか自己紹
介をすることに成功した。その後のなのはとはやても、同様に顔が
少しだけ引きつっていた感は否めなかったが。

「それで……理子……だっけ、君はどうしてここに来たの？」

フェイトが当然ともいえるその質問を切り出すと、

「理子りん、授業つまんないし、退屈だから、サボってきたあ」

三人がここに来た理由と全く同じ答えが返ってきた。

「せやけど、理子ちゃんあんまり廊下とかで見かけへんような気がするけど、何でなん？」

「あー、それは多分、理子りん意外と学校休んじゃったりすることが多いから、だったりするかも」

「あんた度胸あるなあ……」

はやては理子のその思い切りの良さに感心してしまう。横の二人も同様だった。

「ところでさ、三人はここで何しちゃってたりするんですかねえ？」

先ほどの一言であらかた推測はできるけど、という顔をしながら理子は質問した。

「まあ、見ての通り、サボりかなあ、あはは」

なのはが苦笑しながらそれに答えた。まあそれを提案した張本人となれば、答えないわけにもいかないのだが。

「まあ、そういうわけで、私たちはなのはに付き合わされてここに……」

「ウソはあかんでフェイトちゃん？ 屋上行こかってなのはちゃんに誘われたとき、めっちゃ顔キラキラさせとったんどの誰や？」

「はっ！！？」

はやてから蒸し返すような突っ込みを入れられ、フェイトが硬直する。

「あ、あ、アレはただ、その、授業をサボるのもたまには楽しいかなって思っただけで……！！」

完全にフェイトが拳動不審になっている。頬を汗がダラダラ流れているのが見え見えである。理子が密かに、分かりやすいなと心の底で思っていたのはここだけの話だ。

「コホン、とにかく、私たちは単なる思い付きでここに来たわけでひいっ！？」

フェイトが突如理子を見て悲鳴を上げた。

「どっしたんやフェイトちゃん、理子ちゃんになんか

ひゃああっ！？」

はやてがフェイトの動きにつられて理子を見た途端、同じリアクションをする。

「にゃあっ!!!? ちょ、ちょ、ちょっと理子ちゃん!? どうしちゃったのその髪の毛!!!?」

なのはが完全に逃げ腰になりながらも理子に指摘した。

「へ? 理子りんがどうかし

ふええ!!!?」

理子が言われて自分の髪を触ってみるが、三人と同じリアクションをとる羽目になってしまっ。

理子の髪が不気味にもぞもぞとうごめき、振り乱したその見た目がまるで妖怪のようになってしまっていたのだ。

「ちょ、ちょっと、止まってよあ〜!」

理子は必死に自分の髪の毛を押さえつけようとするが、髪はまったく言うことを聞かずうねうねと動き続ける。

「そ、それ、なんなの?」

なのはが恐る恐る聞くと、

「ううん、実はこれ、理子りんの超能力の一部なんだよね、ぶっちゃけて言えば私『思念超動^{テキキープ}』っていう超能力持ってるさあ、何て言つか、髪の毛とかでも自分の手みたいに操れるんだけどだね」

「じゃあ、それも超能力……あれ、今理子ちゃん超能力使おうと思ってるの？」

「そんなはずないに決まってるよお〜！ おっかしいな、止めようと思っても全然止まんない……」

理子は怪訝な顔をした。同時に他の三人は顔を見合わせて、ひそひそと話を始める。

「なんかおかしいんとちゃう？」

「う、うん……超能力の暴走みたいになってるよね……」

「止めようと思っても止められないことなんてあるの？」

「聞いたことないなあ……フェイトちゃんは？」

「わ、私も……」

「超能力エネルギーの暴走やないことは確かなんやけど……」

「ってことは……もしかして、外部からのエネルギーの流入？」

「可能性としては……あるね」

「でも私たちの誰も放出はしてないし……しようとも思っていない……
ちゆうことは……」

『！……！』

そこまではやてが言ったところで、はやてを含めた三人が同時に一つの方向を見た。

被害者の理子に超能力の異常を及ぼしているのが自分たちではない以上、今ここでそんなことができる人間はたった一人しかいない。いるはずがない。

『高岡……くん！？』

それを聞いてハツとしたのが、理子も同じく俺を見た。

当の俺はそんなことなど分かるはずもなく、当の昔に意識が飛んでしまっているわけだが。

そこで初めて、三人は違和感に気づく。

「なんか、いつもと違うような気せえへんか？」

「うん……いつもうたたねしてる時の体勢じゃないよね」いつもと違い、だらしなく両手両足を投げ出して気を失っている俺を見てフエイトが言った。

「た、高岡……くん？」なのはは恐る恐る俺に呼び掛けるが、俺がその声を聞くことはかなわない。

心なしか俺の様子の異変に気付いたのか、なのはは半ばビビりながらも、俺の額に手を当てる。

「熱いつ!! 高岡君、風邪引いてる!!」

なのはは大声を出した。

6月11日、午前10時35分、秋乃原学園屋上にて、病人一名を発見。発見者四名。

複数能力者に振り回される場合？

それから五分後。

「はあ、はあ……」

場所は保健室。硬いコンクリの床から柔らかいベッドの上に転がされた俺と、肩で息をするのは、フェイト。

「あ、あの〜、一応聞くけどお、大丈夫？」理子は恐る恐る二人の様子を伺う。

「ず、随分と軽く言ってくれるね……、ご心配なく、大丈夫、だから」

まったく大丈夫ではない息の切れ方で、フェイトは溺れたように切れ切れに答える。

なのはとフェイトがここまで俺のことを運んできたのは見れば誰でもわかるのだが、息を切らしていることにはそれなりの理由があった。

先ほど理子が自らの超能力を御しきれていなかったように、体調を崩した俺は、超能力のエネルギーをそこらじゅうに垂れ流しの状態だった。

そして、その影響は、周りの人間に当然出てくるのだが、一番影響を受けるのは俺自身に直接触った人間なのだ。ゆえに、俺を持ち上げてここまで運んでこなければならなかったなのはとフェイトは、必死で流れ込むエネルギーの流れを受け流す必要もあったため、そのせいで息が上がっているのである。

とはいえ、これで問題が解決したわけではなく。

「とにかく、安静にさしといて後は私らが耐えんとアカンのやな…」

はやては先行き不安たつぷりの声で言う。安静に出来る場所に運び込んだまではいいが、そこからは俺以外の全員だけが参加する耐久レースなのだ。つまりそれは、ひとえに俺が治ることを考えるよりも先に、まず自分たちが最後まで耐えきる必要があるのだということに他ならない。一言でいえば、サバイバルレースである。切り抜ける自信があるかと言われれば、正直四人とも微妙だった。

その後しばらくして、俺は死人のようにベッドに寝かされていた。頭には保冷材をくるんだタオルが乗せられていた。無論、意識は暗闇の底である俺がそんなことは分かるはずもない。

「とりあえず、こんなもんでええな」

はやてはそう言って手近にあった椅子に座りこむ。

季節は秋である。とは言え、まだ時々暑い日があることには変わりがない時期で、四人は暑いのを我慢して冷房を止めていた。廊下の出入り口だけは悪いと思いつつ開けておくことにしたが、はつきり言っただけほとんど効果は無かった。

午前11時03分

「それにしても、珍しいね、こんな時期に風邪なんて」となのはは氷入りの麦茶を飲みながら不思議そうに言った。

茶はフェイトが用意してくれたもので、こんなものでもないと思くてやっていらなかったからだ。

「季節の変わり目だからね……体調を崩しても可笑しくは無いと思うよ」

フェイトは俺の方をちらっと見ながら言う。

「せやけど、なんで高岡くんが風邪ひくんやるか……てつきりもちよつと丈夫な人間か思とつたんやけど……」

「まさか……いくらレベルの高い超能力者でも体調管理とかそういうことはまた別問題なんじゃ……」はやての偏見にも似た発言にフェイトは苦笑いする。

「ねーねー、フッチー」理子が良く分からないあだ名で誰かを呼ぶもつとも、今この場所で「フ」で連想される人間など一人しかいないのだが。

「え、私？」フェイトはなにやら神妙な顔で自分を指差す。

「そうそう。で、フッチーってさー、ヒツくんのこと好きだったりしちゃう？」

「ぶっ!?!」

理子の爆弾質問にフェイトは麦茶を思い切り吹き出して咽せ込む。なのはとはやても、必死に平静を保とうとはしていたが、動揺と興味を隠せていない眼だった。

「ど、ど、どうしてそうなるの!？」

「いやあ、なんか、ヒツクんの体調管理がどうだとか気にしてるあたり、意外とフツチー世話焼きかなとか思ったりして〜」

「そ、そ、そんなことは……」無い、と言いかけたフェイトだったが、良く考えるとそう言われる要素がある気がしなくてもない。実際、なのはからは仕事の際に世話焼きとか過保護だとか面倒見すぎだとか良く言われたりすることがあったからだ。

「……………」

そしてそれきり顔を真っ赤にしたままフェイトは黙り込んでしまふ。この手の話に弱いフェイトは、完全に脳の思考回路がオーバーヒートを起こし、機能が停止していた。

「もお、理子ちゃんちょっとからかい過ぎ」

なのはは憤慨して理子に詰め寄った。

「え〜、面白いのになあ……あ、それはそつと、そういうナノナノはどうなの?」

「ふえっ!？」

まさか自分にその話を振られるとは予想していなかったのか、なのはは慌てる。

「もしかしてもう一線越えちゃったとか？」

「ふええ！？ ななな、な、何言ってるの!？」

面白いようにあたふたとろたえるのは。完全に動揺していることが丸見えだ。これでは理子のいいようなオモチャである。

午前11時26分。

「あ、暑ッ……」

はやては呻いた。同時におかしいという感じが少ししていた。

カーテンを閉め切っているのに室温が上がり続けているのである。先ほど飲みほした水がたちまちのうちに汗となって身体から逃げ出す。しかし、ここまで暑いというのに、ベッドに横たわる病人は呻き声の一つも上げないで死んだように眠っている。

そして、はやてが、もしかしてと思った時にはすでに遅かったのだ。

「あ、暑い……よ……」

突如、フェイトがするすると制服を脱ぎだす。

「ちょ、フ、フェイトちゃん!？」

いつもならこの手のネタには嬉々として食いつくはやてだが、今回ばかりはそうもいかなかった。

「は……はやて……」

「ちょ、ちょお待ってな!? おかしいで!？」

はやての忠告にもフェイトは耳を貸さない。ブレザーの下に着ていたYシャツ一枚だけの姿になり、はやてに絡みつくと、はやてのブレザーのネクタイとボタンをゆっくりと外していく。完全に理性のタガが外れてしまったフェイトには、はやての言葉はもはや届いていない。

「な、なのはちゃ……ってなのはちゃんまで!？」

なんとそこになのはも乱入する。制服は乱れ、目は明らかにピン트가合っていない。身の危険のようなものを感じたはやてはとっさに渾身の力でフェイトの拘束から抜け出そうとするが、後ろから絡みついてきたなのははやての耳に息を吹きかけたせいで、力が一瞬にして抜けてしまう。

「おう、みんなお熱いねえ」

理子はそんな光景を横目で眺める。

「ちょ、理子ちゃ、見てへんで助けてえな!!」ゾンビに絡まれたような体勢ではやては懇願する。

「え〜、なんでえ〜？面白くなりそうなのにい〜」

「なんでやあらへん！！このままやったら私食い物にされてまう！！」

「ほおほお、つまりは二人にイタダキマースされちゃいそうなわけ？」

「呑気に説明せんでええ！！頼むから二人をはがしてえな！！」

「仕方ないなあ、だけど、助けるのは理子りんがはやてに仕返ししてからだよ〜」

「へ？」はやては一瞬訳が分からないという顔をした。

「この間、理子りにセクハラしておいて逃げた、お・か・え・し」

「な、まさか、あん時のこと……」

「だいせいかい」

はやては数日前に理子の腰を触り逃げたことを後悔した。はやてのセクハラは一種のスキンシップというべきか、それは学校の生徒の間、主に下級生の間で噂になっているのだが、セクハラといえど男が同じことをやるのとはわけが違う。ちよつとした冗談めいたことなのだ。

しかし、理子はそれを口実にはやてに迫った。魂胆はもつと面白くしたいと思っていたに違いないが、それでも理由としてはやてに突きつけるには十分すぎる説得力があった。

「ちょっとくすぐりたいけどお、我慢してねえ？」

「ひぁ！？ ちょっと、どこ触ってんの！？」

「はやてがいつも触ってるところ」

はやては自分の行いがまさか束になって自分に返ってくるとは思ってもよらなかった。暑さと混乱で頭が回らなくなる。上から下までまんべんなく回される6つの手。そして吹きかけられる吐息。

もはや理性の限界だった。

午前11時38分。

理子に口を塞がれながらだったが、はやての甲高い悲鳴にも似た叫び声が響いた。しかしそれを保健室の外で聞いた者はいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2275t/>

とあるアニメの交錯日常物語(クロスオーバー・デイズ)

2011年10月9日02時04分発行